公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告149

Ⅰ　太田川遺跡（第５次調査）
Ⅱ　太田川遺跡（第６次調査）
Ⅲ　恩智遺跡（第37次調査）
Ⅳ　恩智遺跡（第40次調査）
Ⅴ　恩智遺跡（第41次調査）
Ⅵ　木の本遺跡（第29次調査）
Ⅶ　郡川遺跡（第23次調査）
Ⅷ　郡川遺跡（第24次調査）
Ⅸ　神宮寺遺跡（第３次調査）
Ⅹ　水越遺跡（第21次調査）
Ⅺ　水越遺跡（第24次調査）
Ⅻ　水越遺跡（第25次調査）

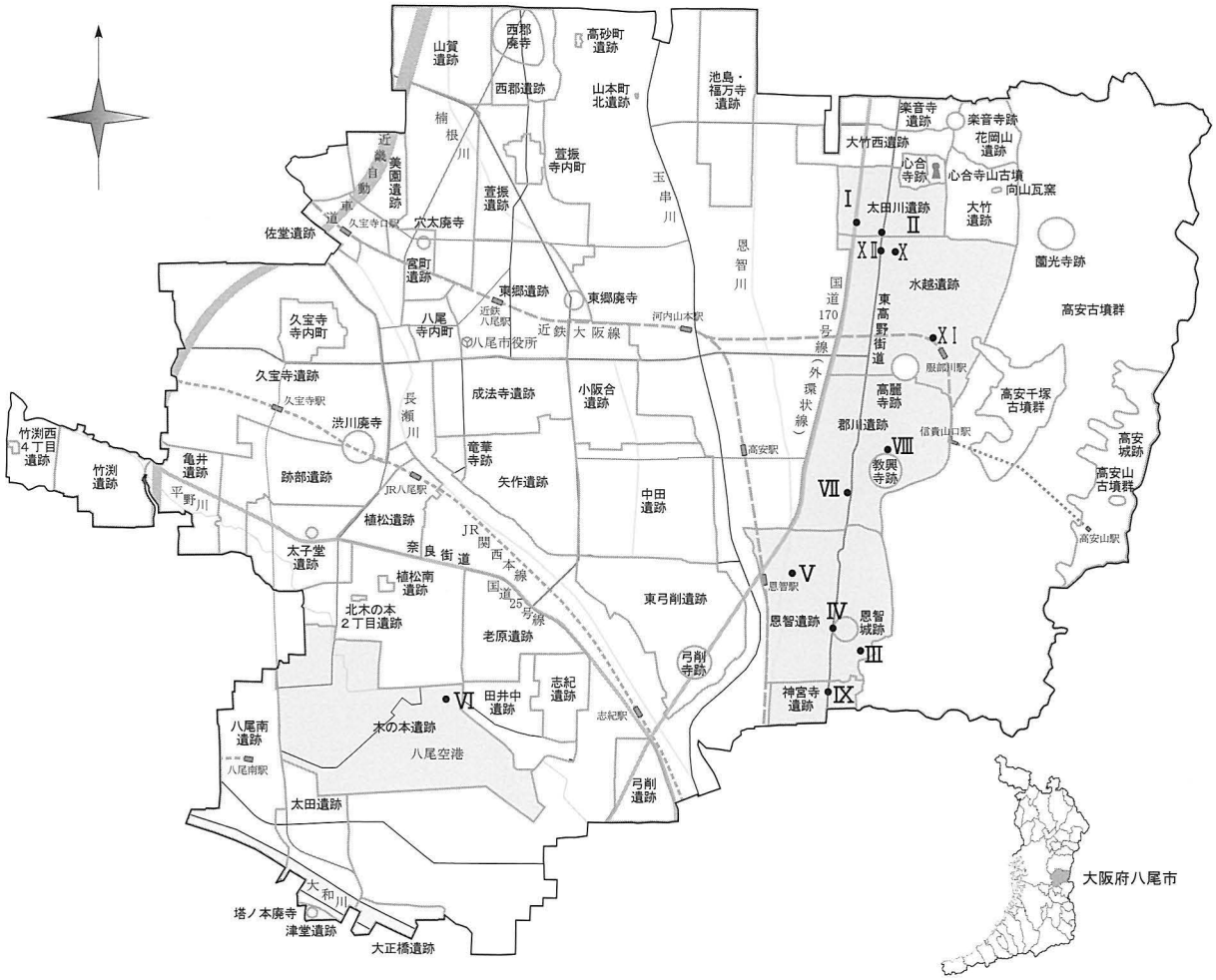
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１６年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

Ⅰ　太田川遺跡（第５次調査）
Ⅱ　太田川遺跡（第６次調査）
Ⅲ　恩智遺跡（第37次調査）
Ⅳ　恩智遺跡（第40次調査）
Ⅴ　恩智遺跡（第41次調査）
Ⅵ　木の本遺跡（第29次調査）
Ⅶ　郡川遺跡（第23次調査）
Ⅷ　郡川遺跡（第24次調査）
Ⅸ　神宮寺遺跡（第３次調査）
Ⅹ　水越遺跡（第21次調査）
Ⅺ　水越遺跡（第24次調査）
Ⅻ　水越遺跡（第25次調査）

下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



２０１６年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古くは旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では古大和川水系の河川が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に弥生時代以降の生活の跡が連綿と積み重なっています。

このような先人達の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといっても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めているところであります。

本書は、市民生活に密接にかかわる公共下水道工事に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成26・27年度に行った６遺跡12件の調査成果が収録されています。いずれも小規模な調査ではありますが、弥生時代後期以降、中近世に至るまでの遺構や遺物が検出されております。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成28年３月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長　平　野　佐　織

序

1．本書は、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成26・27年度に実施した八尾市下水道工事に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内訳は次表のとおりである。
1．本書で報告する発掘調査業務は、八尾市教育委員会と八尾市、及び当調査研究会の三者により締結した協定に基づくもので、八尾市教育委員会からの埋蔵文化財発掘調査指示書により当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．本書作成の業務は、八尾市と当調査研究会で交した覚書に基づき、各現地調査終了後に着手し、平成28年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は，目次のとおりである。
1．本書の執筆は各調査担当者が行い、全体の構成・編集は西村公助が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１地形図(平成８年７月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成27年度版)をもとに作成した。
1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である.
1．本書で用いた方位は座標北(国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕)を示している。
1．遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。
1．土色については、一部の調査を除き『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

調査一覧	
平成26年度	平成27年度
Ⅲ　恩智遺跡第37次調査（ＯＪ2014－37）	Ⅰ　太田川遺跡第５次調査（ＯＴＧ2015－５）
Ⅸ　神宮寺遺跡第３次調査（ＺＧ2014－３）	Ⅱ　太田川遺跡第６次調査（ＯＴＧ2015－６）
	Ⅳ　恩智遺跡第40次調査（ＯＪ2015－40）
	Ⅴ　恩智遺跡第41次調査（ＯＪ2015－41）
	Ⅵ　木の本遺跡第29次調査（ＳＫ2015－29）
	Ⅶ　郡川遺跡第23次調査（ＫＲ2015－23）
	Ⅷ　郡川遺跡第24次調査（ＫＲ2015－24）
	Ⅹ　水越遺跡第21次調査（ＭＫ2015－21）
	Ⅺ　水越遺跡第24次調査（ＭＫ2015－24）
	Ⅻ　水越遺跡第25次調査（ＭＫ2015－25）

目　　次

はしがき
序
Ⅰ　太田川遺跡第５次調査（ＯＴＧ2015－５）……1
Ⅱ　太田川遺跡第６次調査（ＯＴＧ2015－６）……5
Ⅲ　恩智遺跡第37次調査（ＯＪ2014－37）……9
Ⅳ　恩智遺跡第40次調査（ＯＪ2015－40）……15
Ⅴ　恩智遺跡第41次調査（ＯＪ2015－41）……21
Ⅵ　木の本遺跡第29次調査（ＳＫ2015－29）……25
Ⅶ　郡川遺跡第23次調査（ＫＲ2015－23）……29
Ⅷ　郡川遺跡第24次調査（ＫＲ2015－24）……35
Ⅸ　神宮寺遺跡第３次調査（ＺＧ2014－３）……41
Ⅹ　水越遺跡第21次調査（ＭＫ2015－21）……45
Ⅺ　水越遺跡第24次調査（ＭＫ2015－24）……53
Ⅻ　水越遺跡第25次調査（ＭＫ2015－25）……59

報告書抄録

Ⅰ　太田川遺跡第５次調査(ＯＴＧ2015－５)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越一丁目地内で実施した下水道工事（26-６工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する太田川遺跡第５次調査（ＯＴＧ2015－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年６月12日（外業実働１日：夜間調査）に、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約4.0㎡である。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月31日をもって終了した。
　デジタルトレース－樋口
1．本書の執筆・編集は樋口が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1
2．調査概要……2
　1）調査の方法と経過……2
　2）基本層序……2
　3）検出遺構と出土遺物……3
3．まとめ……3

Ⅰ　太田川遺跡第５次調査（ＯＴＧ2015－５）

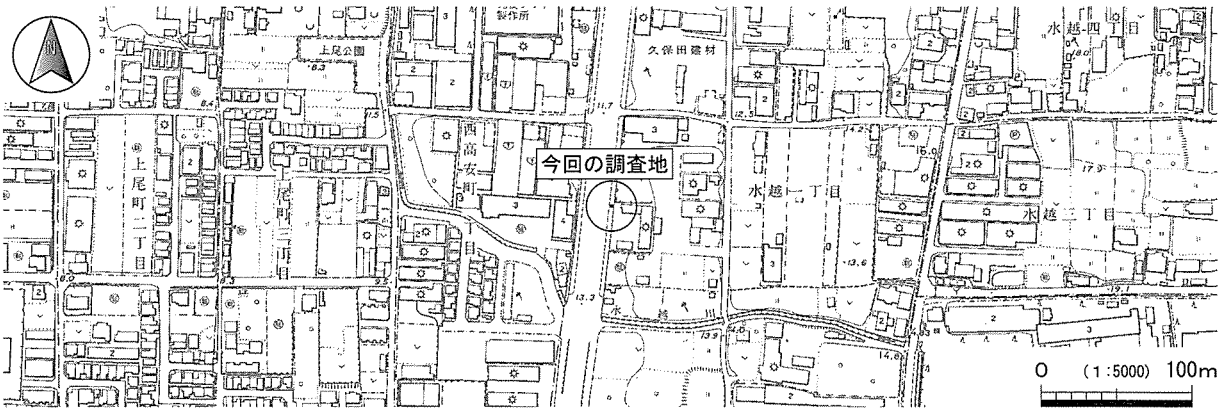
１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する太田川遺跡は、八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹一・三・四丁目、水越一・三・四丁目、西高安町一・二丁目の東西約0.85km、南北約0.5kmがその範囲と推定されている。地形的には、生駒山地西麓部を西流する太田川と水越川に挟まれた扇状地から扇状地性低地に展開する遺跡である。遺跡の西側には、旧大和川の主流であった恩智川や玉串川の氾濫原が拡がっている。

本遺跡は、昭和15（1940）年３月に行われた東高野街道改修工事の際、滑石製勾玉・弓筈状木製品等を含む地層が確認されたことによりその存在が初めて確認された遺跡である。その後、八尾市教育委員会による昭和56（1981）年の立会調査や、昭和57（1982）年には最初の発掘調査（太田川市82）が実施され、前者では古墳時代の遺物包含層を、後者では弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。その後も遺構確認調査や小規模な発掘調査が市教委や当調査研究会によって断続的に実施されており、その結果、当遺跡は縄文時代後期～中世の複合遺跡として認識されるようになった。

今回の調査地周辺では、北約150ｍに位置する第１次調査地において、縄文時代晩期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良時代に亘る遺構・遺物を検出している。なかでも古墳時代後期の溝から出土した滑石製有孔石製品の未成品は、当該期の水越遺跡や池島・福万寺遺跡などの玉造関連遺跡との関係を考える上で注目される資料となっている。また、本地の東方350～400ｍ付近に位置する第２～４次調査地では、弥生時代後期の遺構や遺物包含層が検出されており、当該期の居住域が広く展開している可能性を示唆する成果を得た。一方、第３・４次調査地では、縄文時代晩期や後期前葉の遺物包含層を確認しており、特筆される。

本遺跡の周辺には、同地形上において数多くの遺跡が存在する。北側には弥生時代以降の複合遺跡である大竹西遺跡が存在するほか、古墳時代中期前半に造営された中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳（墳丘長160ｍ以上）が知られる。また東側には大竹遺跡が接するほか、さらに東方には古墳時代後期以降の高安古墳群が群集している。南には縄文時代後期末以降の複合遺跡である水越遺跡が展開している。



第１図　調査地周辺図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

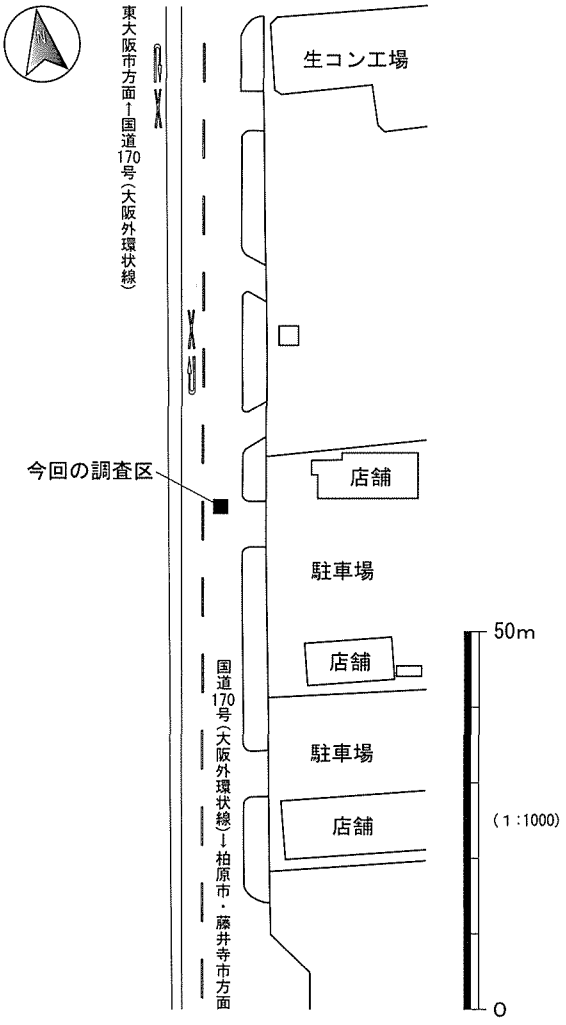
今回の発掘調査は八尾市水越一丁目地内で実施した下水道工事（26-６工区）に伴うもので、当研究会が太田川遺跡で実施した第５次調査（ＯＴＧ2015－５）にあたる。調査区は人孔部分（平面規模2.0×2.0m　面積約4.0㎡）１箇所である。

調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表（T.P.+12.6m）下2.7m前後までを人力と機械を併用しながら掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査は夜間に実施した。

調査で使用した標高は、調査区付近に打設された下水道工事使用のベンチマークである。

２）基本層序

現地表（T.P.+12.6m）下1.7mまでは客土・盛土層（０層）である。以下現地表下2.7mまでの1.0m間において３層の基本層序を確認した。１層は河川堆積層（T.P.+10.9m）である。ラミ



第２図　調査区位置図

ナ構造を認める。２層は扇状地性堆積層（T.P.+10.8m）である。大礫～巨礫を含む地層で、土石流に伴う堆積層の可能性がある。３層は湿地性堆積層（T.P.+10.3m以下）である。

３）検出遺構と出土遺物

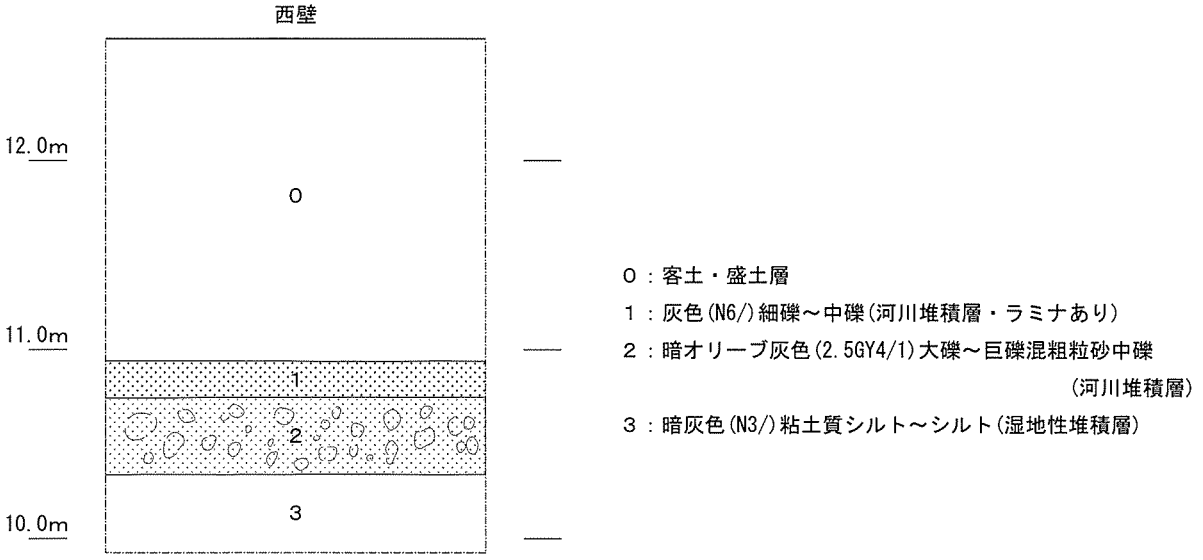
なし。

３．まとめ

今回の調査では、０層直下において１～３層水成層が存在することを確認した。この内２層については、大礫～巨礫が多く混在していたことから、土石流に伴う堆積層の可能性が考えられる。本地の南側には、西流する水越川が存在することから、今回確認した１～３層は、水越川の前身河川に伴う水成層と考えられる。

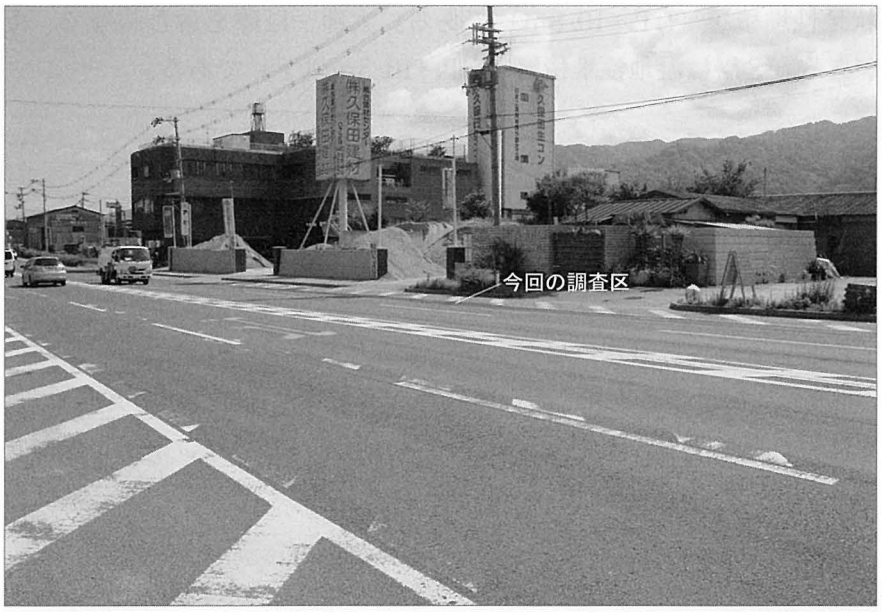
【参考文献】

・原田　修・久貝　健・島田和子1976『大阪文化誌　第２巻・第２号・通巻第６号』財団法人大阪文化財センター
・財団法人八尾市文化財調査研究会1983「付章　昭和55・56年度調査一覧表」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告２』
・原田昌則・成海佳子1983「第３章　太田川遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和56・57年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告３』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一1994「Ⅲ　太田川遺跡第１次調査（ＯＴＧ93－１）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2007「1-1-2　太田川遺跡（2005-473）の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・坪田真一2014「Ⅲ　太田川遺跡第２次調査（ＯＴＧ2013－２）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告143』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2014「Ⅱ　太田川遺跡第３次調査（ＯＴＧ2013－３）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告145』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2015「Ⅱ　太田川遺跡第４次調査（ＯＴＧ2014－４）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告146』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

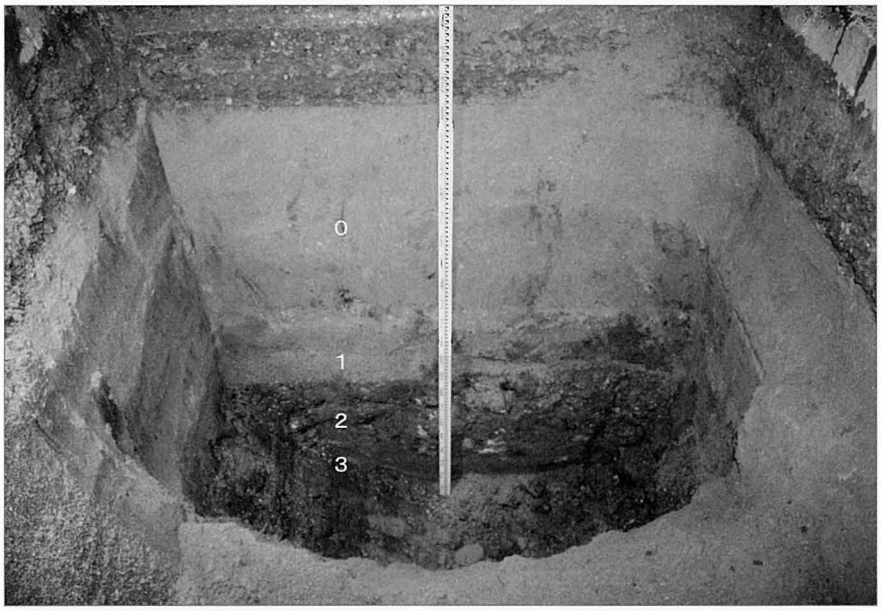


第３図　断面図（Ｓ＝１/40）

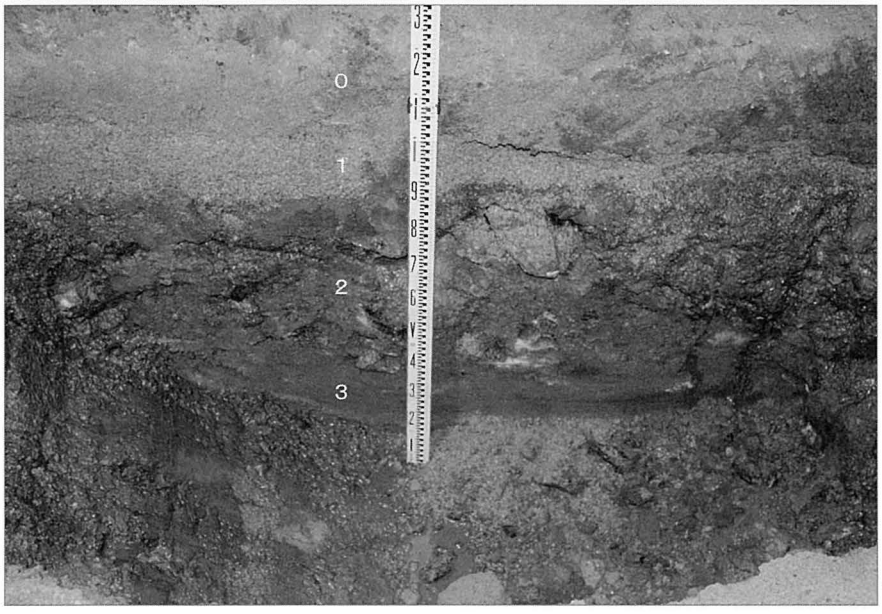
図版1



調査地周辺状況（南西から）



西壁（東から）



西壁（東から）

II　太田川遺跡第６次調査(ＯＴＧ2015－６)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越一、三丁目地内で実施した下水道工事（26-116工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する太田川遺跡第６次調査（ＯＴＧ2015－６）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年６月25日（外業実働１日：夜間調査）に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約4.0㎡である。
1．内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

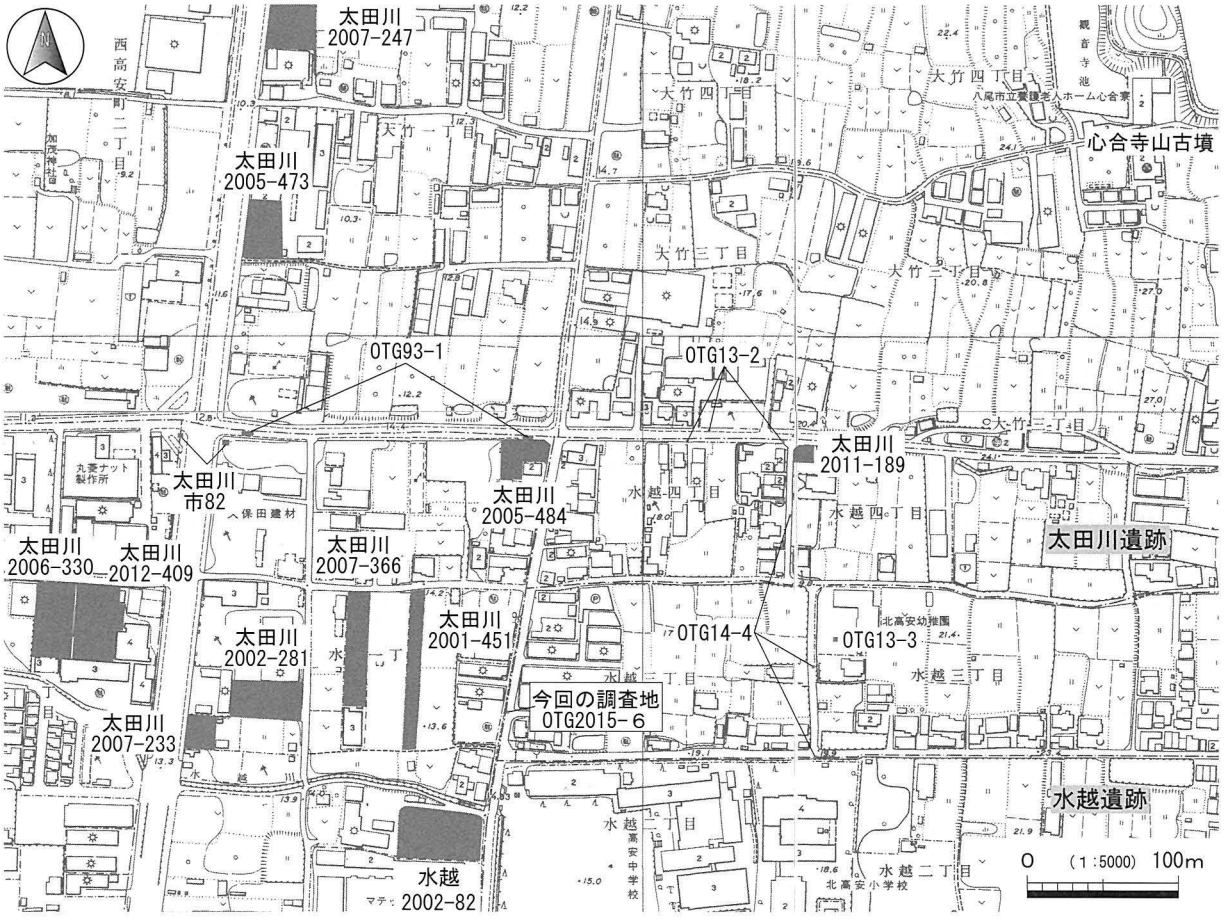
1．はじめに……5
2．調査概要……6
　1）調査の方法と経過……6
　2）基本層序……6
3．まとめ……6

Ⅱ　太田川遺跡第６次調査（ＯＴＧ2015－６）

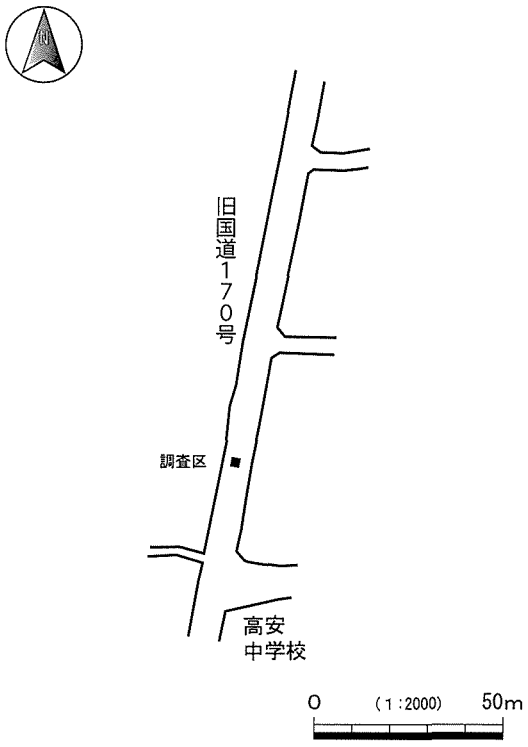
１．はじめに

太田川遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹一・三・四丁目、水越一・三・四丁目、西高安町一・二丁目の、南北約500m・東西約850mがその範囲とされている。地理的には生駒山西麓の扇状地先端部にあたり、西流する太田川と水越川に挟まれた地域であり、同地形上において北側で大竹西遺跡、心合寺山古墳、心合寺跡、東側で大竹遺跡、南側で水越遺跡に接している。

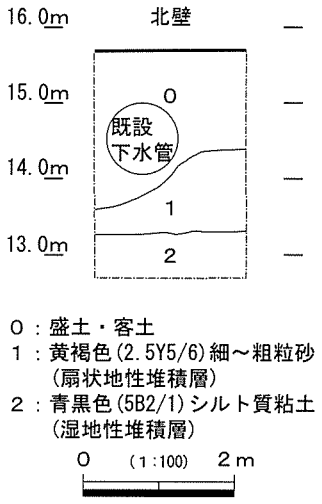
当遺跡が認識されたのは、昭和15（1940）年３月、東高野街道改修工事の際、滑石製勾玉・弓筈状木製品等を含む地層が確認されたことによる。そして八尾市教育委員会により昭和56(1981)年に立会調査、さらに昭和57（1982）年には最初の発掘調査（太田川市82）が実施され、前者では古墳時代包含層、後者では弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。その後も遺構確認調査や小規模な発掘調査が市教委・当調査研究会によって継続的に実施されており、当遺跡は弥生時代～中世の遺跡として認識されている。



第１図　調査地周辺図



第２図　調査区位置図



第３図　断面図

今回の調査地周辺では、北に約200ｍの太田川2005-484で、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての土壌化層の存在を確認している。また北東約250ｍの太田川遺跡第２次調査（ＯＴＧ13－２）では、弥生時代後期、古墳時代の遺物包含層を確認し、さらに東約200ｍの第３・４次調査（ＯＴＧ13－３・ＯＴＧ14－４）では、縄文時代後期と晩期の遺物包含層、弥生時代後期の遺構・遺物を確認し、居住域の存在が明らかになっている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市水越一、三丁目地内で実施した下水道工事（26-116工区）に伴う調査で、当調査研究会が太田川遺跡内で行った第６次調査（ＯＴＧ2015－６）である。

調査地は道路上に設置される人孔部分１箇所（約2.0×2.0ｍ）で、面積は約４㎡を測る。

調査は現地表（T.P.+15.7ｍ）下2.9ｍについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では各調査区周辺に位置する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序

№10人孔を現地表下約2.9ｍまで調査した。現地表面の標高はT.P.+15.7ｍである。３層の堆積を確認した。０層は盛土である。１層は扇状地性堆積層である。２層は湿地性堆積層である。

３．まとめ

今回の調査では、T.P.+14.4ｍ以下において、水成層を確認した。出土遺物がなく、各地層の

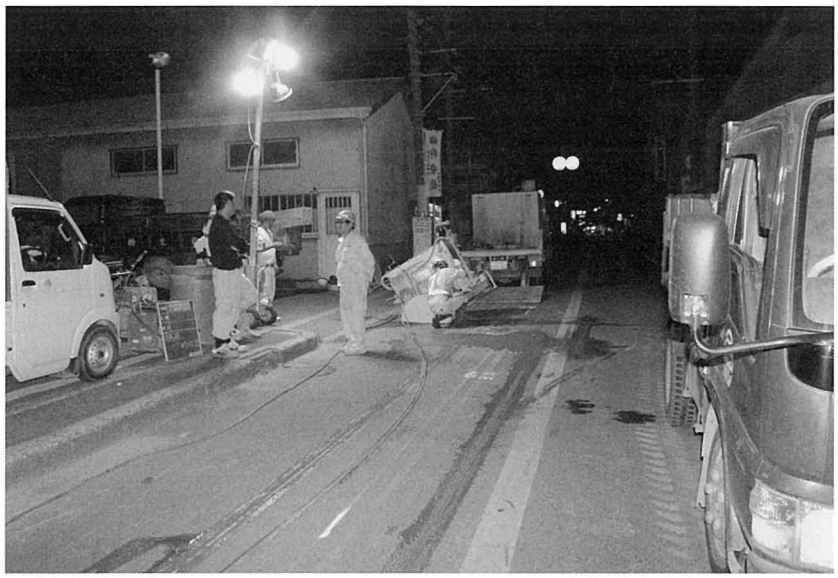
時期は不明であるが、本地は谷地形であった可能性が考えられる。

本地の東側約200ｍの太田川遺跡第３・４次調査地（ＯＴＧ2013－３・４）では、縄文時代後期および晩期の遺物包含層、弥生時代後期の遺構などが見られ、当該期の居住域が確認されているが、本地では皆無であった。

【参考文献】

・樋口　薫2007「2-3　太田川遺跡（2005-484）の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・坪田真一2014「Ⅱ太田川遺跡第３次調査（ＯＴＧ2013－３）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告145』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2015「Ⅱ太田川遺跡第４次調査（ＯＴＧ2014－４）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告146』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1



調査地周辺（南から）

掘削状況（南東から）

北壁（南から）

Ⅲ　恩智遺跡第37次調査(ＯＪ2014－37)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智南町五丁目地内で実施した下水道工事（25-36工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する恩智遺跡第37次調査（ＯＪ2014－37）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成26年８月19日～平成27年３月８日（外業実働４日）に、坪田真一・樋口　薫を担当者として実施した。調査面積は約16.0㎡である。
1．現地調査においては飯塚直世・市森千恵子・垣内洋平・芝﨑和美・松田逸朗・村井俊子の参加を得た。
1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
　遺物実測－飯塚
　遺物トレース－市森
　その他－坪田・樋口
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……9
2．調査概要……10
　1）調査の方法と経過……10
　2）基本層序と出土遺物……10
3．まとめ……12

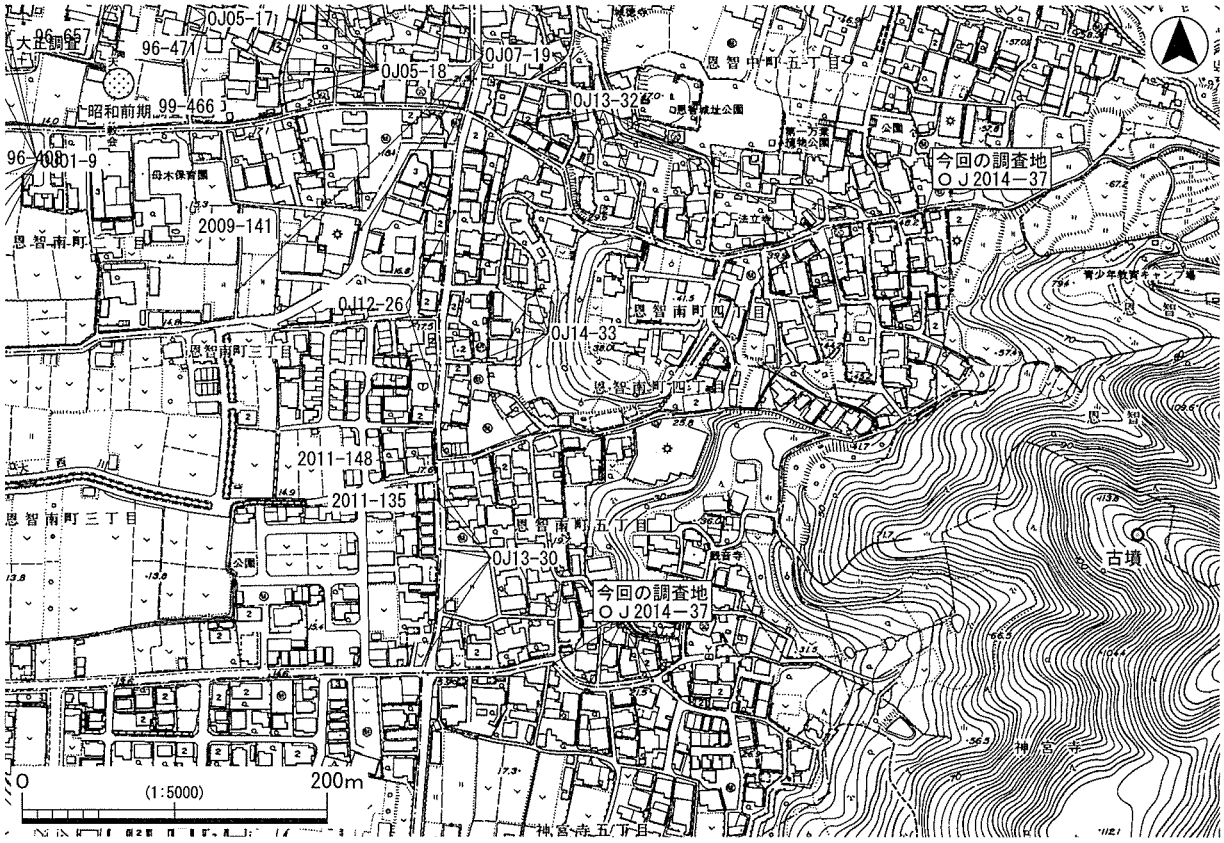
Ⅲ　恩智遺跡第37次調査（ＯＪ2014－37）

１．はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町一～四丁目、恩智中町一～五丁目、恩智南町一～五丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正６（1917）年の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23(1948)年の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53（1975～1978）年には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町三丁目に位置する『天王の杜』周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の南東部にあたり、周辺では第30次調査（ＯＪ2013－30）や第32次調査（ＯＪ2013－32）を実施している。前者では中世、後者では近世の洪水に伴うと考えられる砂礫層を確認した。



第１図　調査地周辺図

２．調査概要

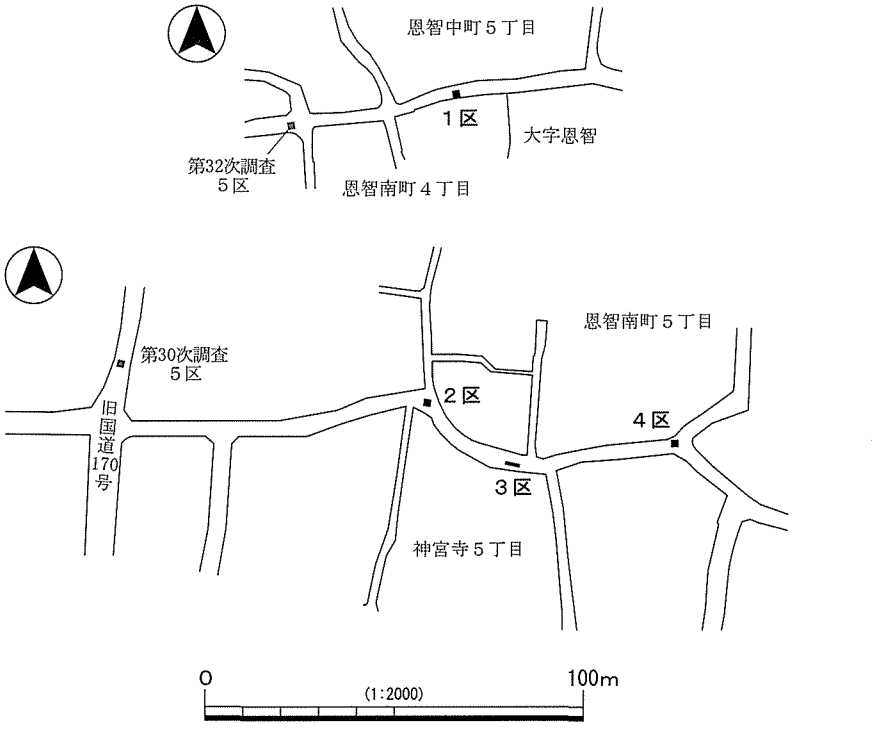
１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市恩智南町五丁目地内で実施された下水道工事（25-36工区）に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第37次調査（ＯＪ2014－37）である。

調査対象は人孔部分３箇所、管路部分１箇所（北から１～４区）で、調査面積は約16㎡である。調査地は、八尾市東部を縦断する旧国道170号（東高野街道）東側に所在し、北部の１区、南部の２～４区に分かれている。１区は南北朝時代の山城である恩智城跡南東部に位置し、２～４区は南の神宮寺遺跡との境界となる東西道路上に位置する。

調査は１区では現地表（約T.P.+50.0m）下1.5mまで、２～４区では現地表（約T.P.+18.8～22.8m）下2.0～3.0mまでを機械・人力掘削併用で実施した。

調査では、調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

２）基本層序

１区

０層は客土・盛土。１層は大礫～巨礫を含む粗粒砂～極粗粒砂からなる地山層である。

２区

０層は盛土・撹乱。１～３層は水成層で、２層は土壌化している可能性がある。４・５層はシルト基調の固く締まる地山層である。

３区

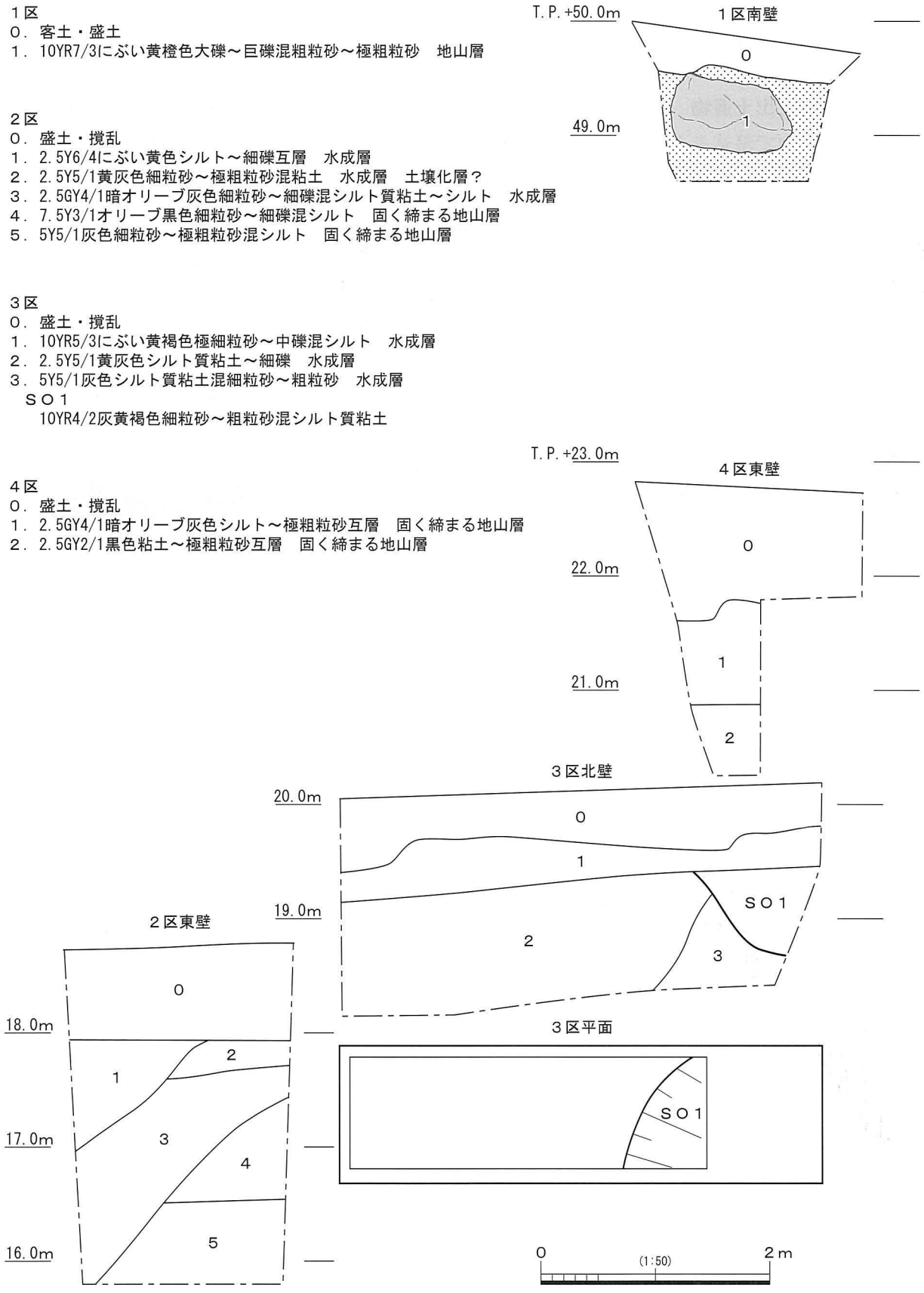
０層は盛土・撹乱。１～３層は水成層である。

１区
０．客土・盛土
１．10YR7/3にぶい黄橙色大礫～巨礫混粗粒砂～極粗粒砂　地山層

２区
０．盛土・撹乱
１．2.5Y6/4にぶい黄色シルト～細礫互層　水成層
２．2.5Y5/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土　水成層　土壌化層？
３．2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～細礫混シルト質粘土～シルト　水成層
４．7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～細礫混シルト　固く締まる地山層
５．5Y5/1灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト　固く締まる地山層

３区
０．盛土・撹乱
１．10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～中礫混シルト　水成層
２．2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土～細礫　水成層
３．5Y5/1灰色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　水成層
ＳＯ１
10YR4/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土

４区
０．盛土・撹乱
１．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～極粗粒砂互層　固く締まる地山層
２．2.5GY2/1黒色粘土～極粗粒砂互層　固く締まる地山層



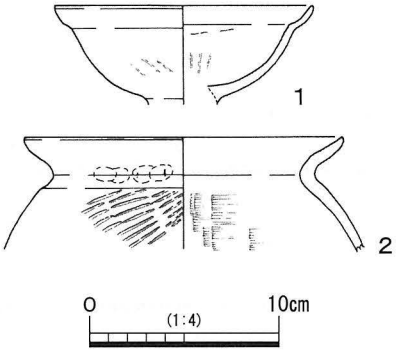
第３図　平断面図

４区

０層は盛土・撹乱。１・２層は固く締まるいわゆる岩盤層である。

３）検出遺構と出土遺物

３区２層上面で落込み１基（ＳＯ１）を検出した。調査区東部で弧状の肩を検出したもので、東に落ち込む。検出部分の規模は南北約1.0m・東西約75cm、深さは北壁で約0.8mを測る。埋土は細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土の単層である。遺物は弥生時代後期の土器が少量出土しており、１・２を図化した。１は受け口状の口縁部を有する鉢である。内外面に縦位のヘラミガキを施す。２は甕で、外面に平行タタキを施す。



第４図　出土遺物

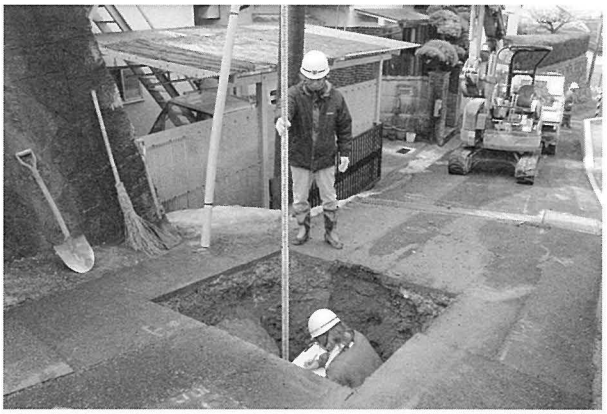
３．まとめ

今回の調査では３区で弥生時代後期の落ち込み（ＳＯ１）を確認した。調査地である旧国道170号（東高野街道）より東側の地域では発掘調査件数も少なく、遺跡の様相については不明な点が多い。今回の調査成果から、北西部の調査地や南の神宮寺遺跡域で確認されている弥生時代の集落域が、３区付近まで広がっている可能性が高くなったといえよう。

【参考文献】

・田代克己・他1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
・米井友美2010「Ⅱ　恩智遺跡第19次調査（ＯＪ2007-19）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告129』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2014「Ⅵ　恩智遺跡第31次調査（ＯＪ2013－31）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告143　下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2013「Ⅲ　恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）、郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012－13）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141　下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一1997「Ⅲ神宮寺遺跡（第１次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

１区南壁



１区調査状況（北東から）

２区東壁

３区全景（西から）

３区ＳＯ１（西から）

３区北壁東部

４区機械掘削（南東から）

４区東壁

Ⅳ　恩智遺跡第40次調査(ＯＪ2015－40)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智中町五丁目地内で実施した下水道工事（26-41工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する恩智遺跡第40次調査（ＯＪ2015－40）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年９月15日～平成27年12月16日（外業実働４日：その内夜間調査３日）に、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約12.0㎡である。
1．現地調査においては、伊藤静江・國津玲子の参加を得た。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月31日をもって終了した。
　デジタルトレース－樋口
1．本書の執筆・編集は樋口が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……15
2．調査概要……16
　1）調査の方法と経過……16
　2）基本層序……17
　3）検出遺構と出土遺物……17
3．まとめ……17

Ⅳ　恩智遺跡第40次調査（ＯＪ2015－40）

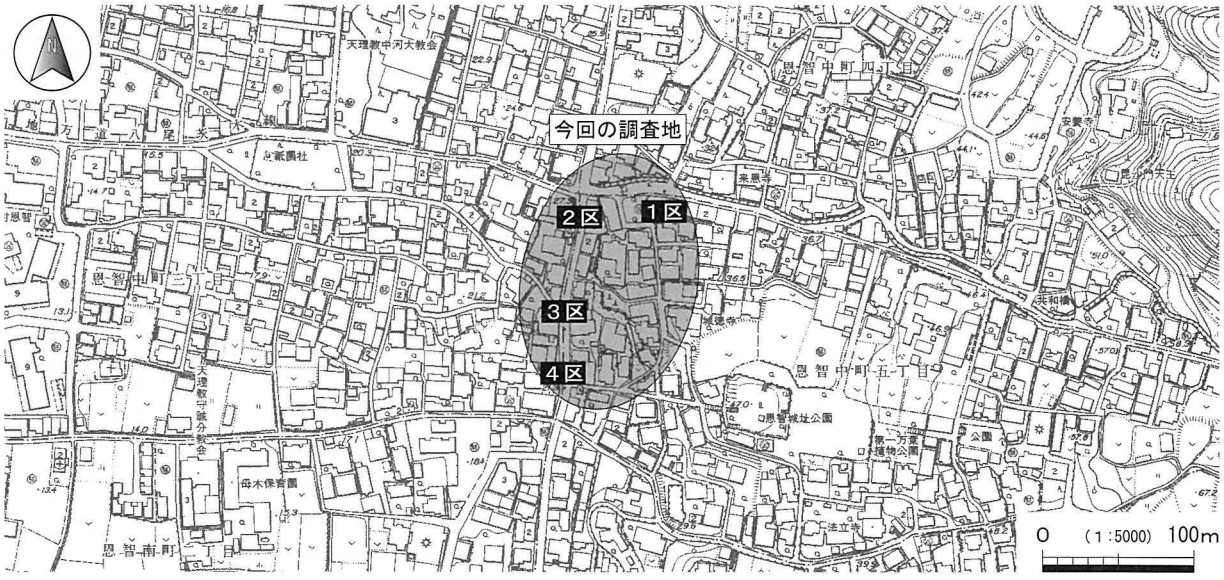
１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する恩智遺跡は、八尾市の南東部に位置する旧石器時代～中世にかけての複合遺跡である。現在の行政区画では恩智北町一～四丁目、恩智中町一～五丁目、恩智南町一～五丁目の、東西約1.2km、南北約1.0kmがその範囲と推定されている。

地形的には、生駒山地西麓部に発達した緩扇状地上から旧大和川水系の主流であった恩智川や玉串川により形成された氾濫原上に立地する遺跡である。

本遺跡については、古くは大正６（1917）年の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23(1948)年の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50（1975）～53（1978）年には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当研究会により多次にわたる調査が実施されてきた。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町三丁目に位置する『天王の杜』周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の南東部にあたり、周辺では南西部で第19次調査、北部で第31次調査、南部で第26次調査、南東部で第32次調査が行われている。この内第19次調査では、扇状地性堆積層を確認したほか、古墳時代前期～中期の土壌化層や近世の遺構を検出した。第31次調査では、縄文時代後期～中世の遺物包含層を確認した。第26次調査では岩盤層や河川堆積層、第32次調査では扇状地性堆積層や岩盤層を確認した。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000）

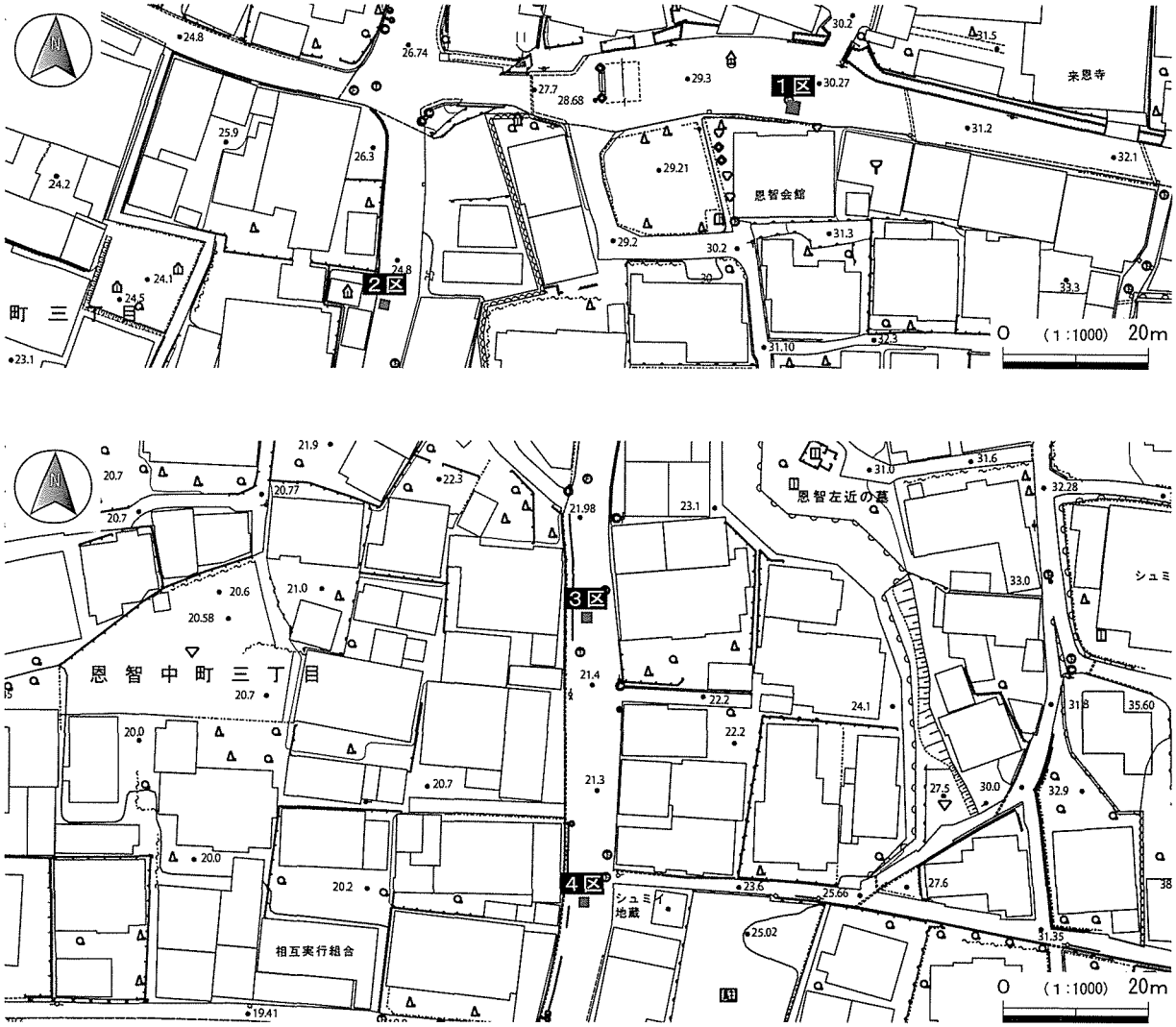
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は八尾市恩智中町五丁目地内で実施した下水道工事(26-41工区)に伴うもので、当研究会が恩智遺跡で実施した第40次調査（ＯＪ2015－40）にあたる。調査区は人孔部分４箇所（北から１～４区）である。各調査区の平面規模は、１区が2.0m四方　面積約4.0㎡、２・４区が1.6m四方　面積約2.56㎡、３区が1.5m四方　面積約2.25㎡、総面積は約12.0㎡を測る。

調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表（１区：T.P.+30.07m　２区：T.P.+24.7m　３区：T.P.+21.7m　４区：T.P.+21.15m）下2.5mまでを人力と機械を併用しながら掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。なお、４調査区の内、２～４区の調査については、夜間に実施した。

調査で使用した標高は、調査区付近に打設された下水道工事使用のベンチマークである。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１/1000）

２）基本層序

現地表下0.7～1.9ｍまでは客土・盛土層・攪乱（０層）である。以下現地表下2.5ｍまでで、２層の基本層序を確認した。１層は、３・４区で確認した中粒砂～巨礫優勢の扇状地性堆積層（T.P.+20.0～21.0ｍ以下）である。ラミナ構造を認める。２層は、１・２区で確認した岩盤層（T.P.+23.5～28.2ｍ以下）である。

３）検出遺構と出土遺物

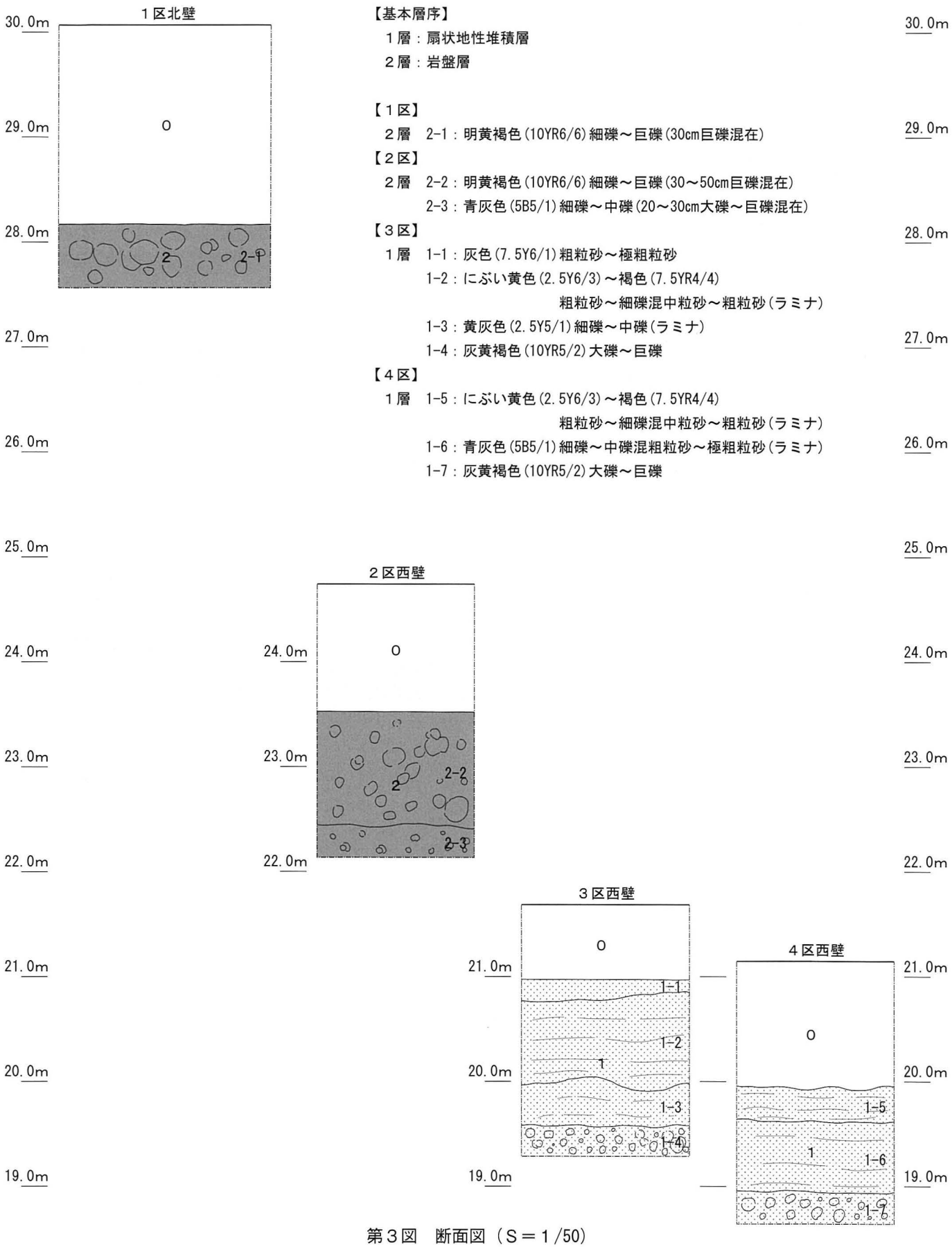
なし。

３．まとめ

今回の調査では、０層直下において、３・４区で扇状地性堆積層を、１・２区で岩盤層を確認した。この結果、３・４区周辺は谷状地形に位置した可能性が高くなった。遺構の有無については、旧石器時代以降の生活面が０層により削平されている可能性が高く、詳細は不明であった。

【参考文献】

・田代克己ほか1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
・米井友美2010「Ⅱ　恩智遺跡第19次調査（ＯＪ2007－19）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告129』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2013「Ⅲ　恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）、郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012-13）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141　下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2014「Ⅵ　恩智遺跡第31次調査（ＯＪ2013－31）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告143　下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2015「Ⅲ　恩智遺跡第32次調査（ＯＪ2013－32）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告146　下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』公益財団法人八尾市文化財調査研究会



【基本層序】
１層：扇状地性堆積層
２層：岩盤層

【１区】
２層　2-1：明黄褐色(10YR6/6)細礫～巨礫(30cm巨礫混在)

【２区】
２層　2-2：明黄褐色(10YR6/6)細礫～巨礫(30～50cm巨礫混在)
　　2-3：青灰色(5B5/1)細礫～中礫(20～30cm大礫～巨礫混在)

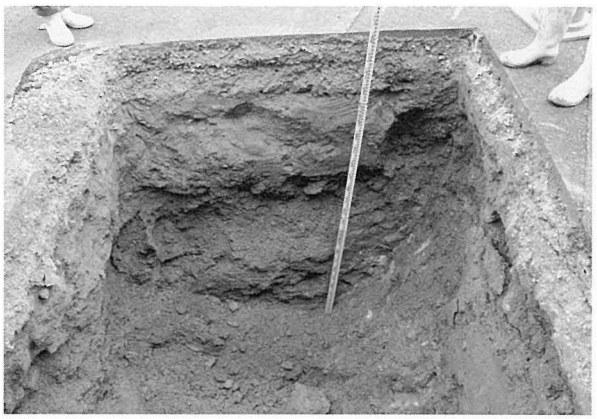
【３区】
１層　1-1：灰色(7.5Y6/1)粗粒砂～極粗粒砂
　　1-2：にぶい黄色(2.5Y6/3)～褐色(7.5YR4/4)
　　粗粒砂～細礫混中粒砂～粗粒砂(ラミナ)
　　1-3：黄灰色(2.5Y5/1)細礫～中礫(ラミナ)
　　1-4：灰黄褐色(10YR5/2)大礫～巨礫

【４区】
１層　1-5：にぶい黄色(2.5Y6/3)～褐色(7.5YR4/4)
　　粗粒砂～細礫混中粒砂～粗粒砂(ラミナ)
　　1-6：青灰色(5B5/1)細礫～中礫混粗粒砂～極粗粒砂(ラミナ)
　　1-7：灰黄褐色(10YR5/2)大礫～巨礫

第３図　断面図（Ｓ＝１/50）

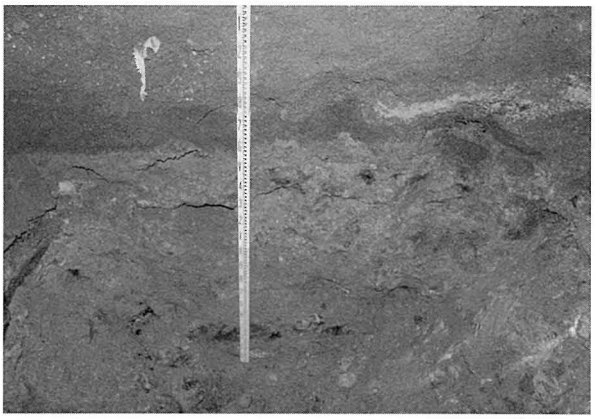
図版1

１区周辺状況（西から）



１区北壁（南から）

２区周辺状況（南から）

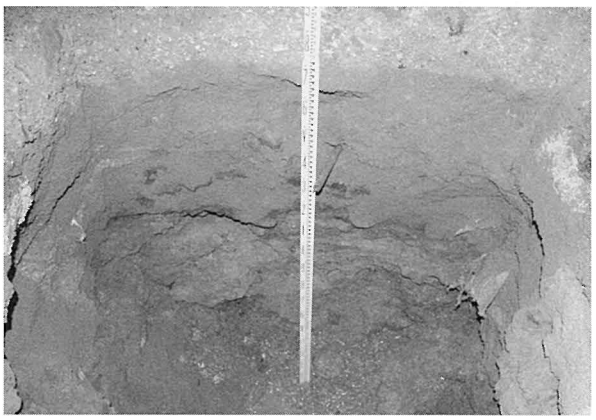


２区西壁（東から）

３区周辺状況（南から）

３区西壁（東から）

４区周辺状況（南から）



４区西壁（東から）

Ⅴ　恩智遺跡第41次調査(ＯＪ2015－41)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智北町二丁目地内で実施した下水道工事（27-12工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する恩智遺跡第41次調査（ＯＪ2015－41）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年９月30日～平成27年10月19日（外業実働２日）に、平田洋司を調査担当者として実施した。調査面積は約8.0㎡である。
1．現地調査においては、松田逸朗・右松浩子の参加を得た。
1．内業整理業務は平田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は平田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……21
2．調査概要……22
　1）調査の方法と経過……22
　2）基本層序……22
3．まとめ……23

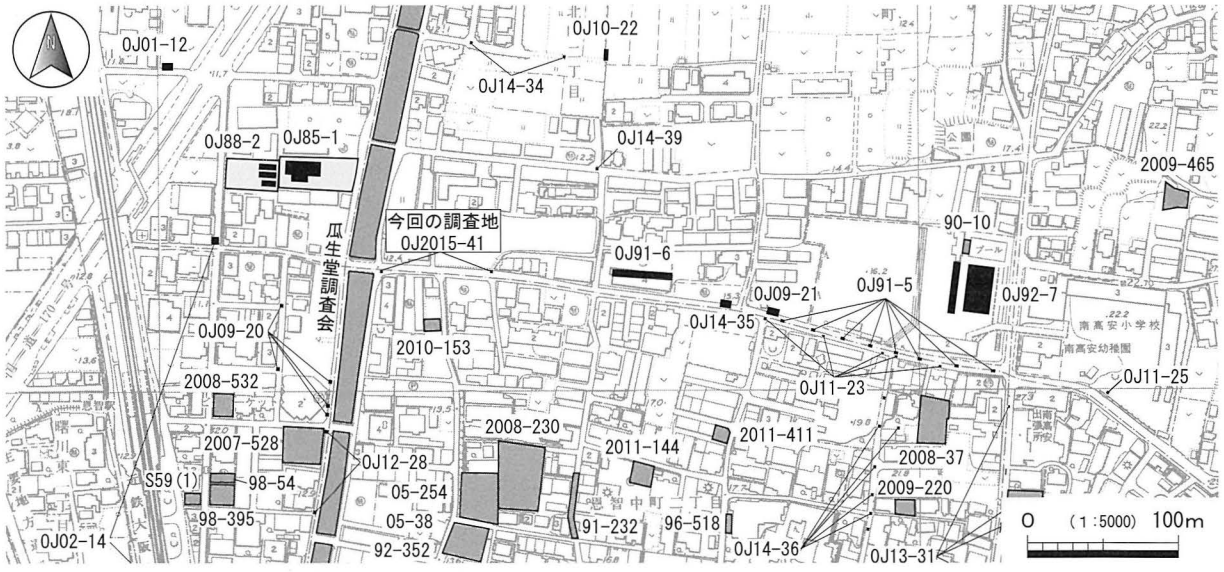
Ⅴ　恩智遺跡第41次調査（ＯＪ2015－41）

１．はじめに

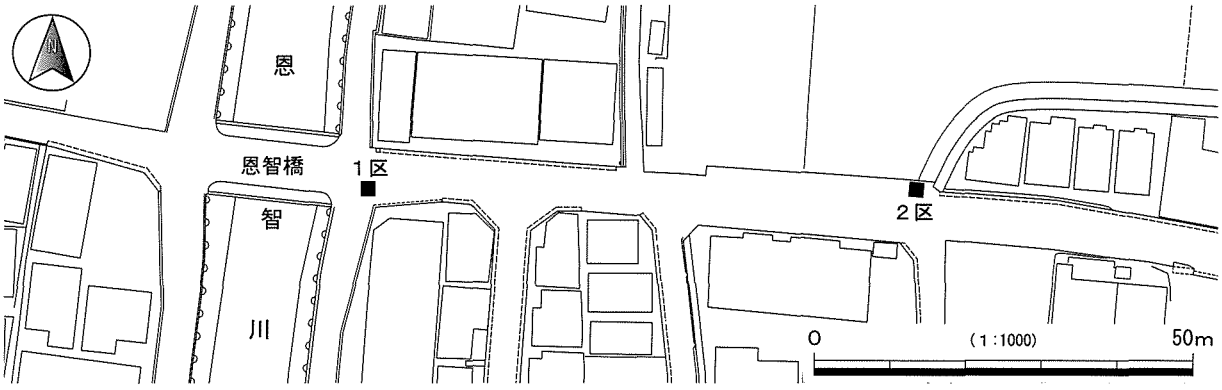
恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町一～四丁目、恩智中町一～五丁目、恩智南町一～五丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正６（1917）年の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23(1948)年の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53（1975～1978）年には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町三丁目に位置する『天王の杜』周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。特に弥生時代には集落規模が拡大し、地域の中心的な役割を果たした大規模な集落であったことが推定されている。

今回の調査地は遺跡範囲の北部にあたり、周辺では、西部で前述の恩智川改修工事に伴う調査、東部で第６次調査（ＯＪ91－６）を実施している。



第１図　調査地周辺図



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市恩智北町二丁目地内で実施された下水道（27-12工区）に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第41次調査（ＯＪ2015－41）である。

調査対象は人孔部分２箇所（西から１・２区）で、面積は８㎡である。

調査は工事掘削深度である現地表（約T.P.+12.6～12.9m）下約2.3～2.5mまで機械・人力掘削併用で実施した。調査では調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。

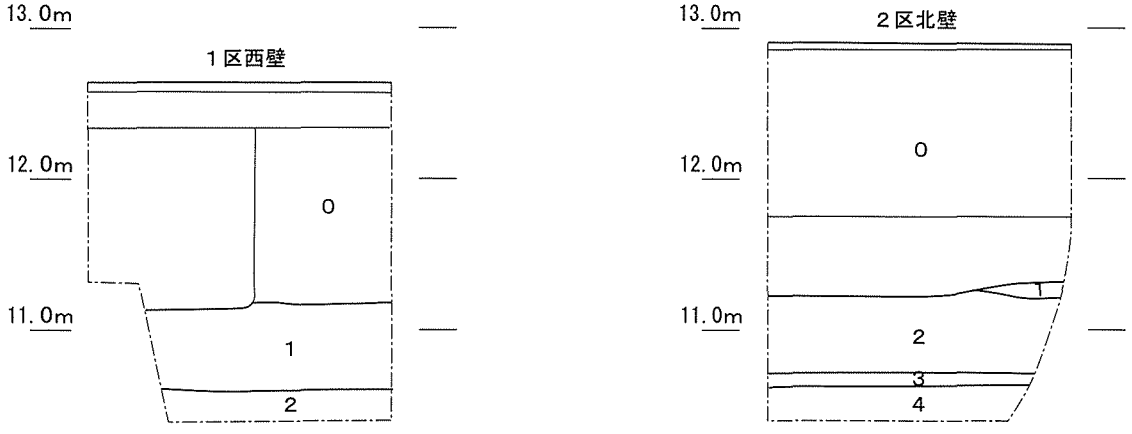
２）基本層序と出土遺物

１区

０層は客土・盛土層および撹乱である。１・２層は扇状地性堆積層で、弥生土器の細片が出土した。

２区

０層は客土・盛土層および撹乱である。１～４層は扇状地性堆積層で、弥生土器の細片が出土した。



０：客土・盛土層・撹乱
１：灰黄色(2.5Y6/2)中粒砂～
　　黄褐色(2.5Y5/4)大礫(扇状地性堆積層)
２：灰色(5Y4/1)シルト(扇状地性堆積層)

０：客土・盛土層・撹乱
１：灰色(10Y4/1)粗粒砂(扇状地性堆積層)
２：オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂質シルト
　　(扇状地性堆積層)
３：黒色(10Y2/1)粗粒砂質シルト(扇状地性堆積層)
４：灰色(7.5Y4/1)粗粒砂(扇状地性堆積層)

第３図　断面図（Ｓ＝1/50）

３．まとめ

今回の調査地は東から西へと緩やかに下がる。１・２区ではT.P.+11.2m以下で扇状地性堆積層が確認された。出土遺物が少ないこと、上位層が失われていることから各層の時期や層序の対比は不明であるが、標高からは弥生時代の生活面はさらに下位に位置すると考えられる。また、２区は小規模な谷筋に位置している可能性もある。

【参考文献】
・田代克己・他1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
・原田昌則1992「Ⅴ　恩智遺跡第６次調査（ＯＪ91－６）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告34　財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2012「Ⅲ　恩智遺跡第22次調査（ＯＪ2010－22）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2015「Ⅴ　恩智遺跡第34次調査（ＯＪ2014－34）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告146』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地周辺状況（西から）

１区西壁（東から）

２区北壁（南から）

Ⅵ　木の本遺跡第29次調査（ＳＫ2015－29）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市空港一丁目地内で実施した下水道工事（26-30工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する木の本遺跡第29次調査（ＳＫ2015－29）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年８月27・28日（外業実働２日）に、平田洋司を調査担当者として実施した。調査面積は約8.0㎡である。
1．現地調査においては飯塚直世・吉田義男の参加を得た。
1．内業整理業務は平田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は平田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……25
2．調査概要……26
　1）調査の方法と経過……26
　2）基本層序……26
3．まとめ……27

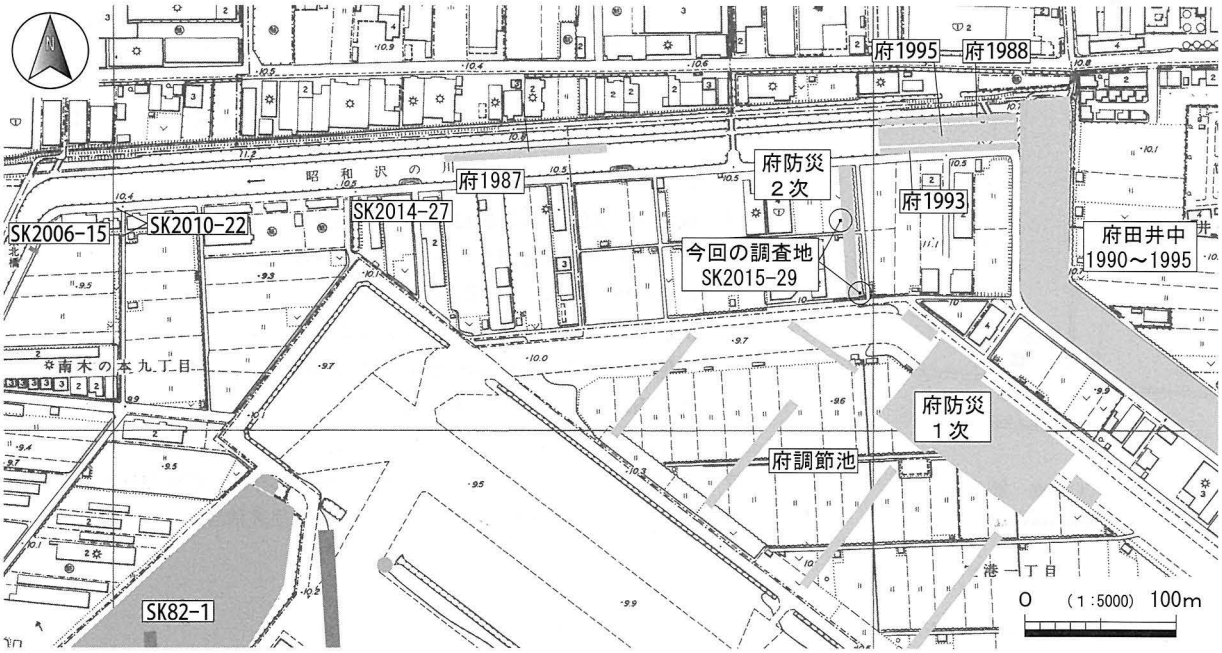
Ⅵ　木の本遺跡第29次調査（ＳＫ2015－29）

１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する木の本遺跡は、本市の南部、現在の行政区画では、木の本一～三丁目、南木の本二～九丁目、空港一丁目の東西約2.0km、南北約1.5kmがその範囲とされている。地形的には、現平野川の左岸に形成された沖積地上に展開する遺跡である。現地表面高を見ると、遺跡南東端が最も高く標高11.9m前後、北西端が最も低く標高10.1m前後で、比高差は約1.8mを測る。概ね南東から北西に緩やかに傾斜する地形を有している。

本遺跡は、昭和56（1981）年度に南木の本四丁目で実施された八尾市教育委員会による試掘調査において、弥生時代中期前半～古墳時代後期の遺物包含層が確認されたことが発見の契機である。続く八尾市教育委員会による発掘調査では、弥生時代中期前半、古墳時代前期・中期の遺構、遺物が検出された。昭和57（1982）・58（1983）年度には、当調査研究会によって八尾空港内の整備事業に伴う第１次調査が行われ、古代及び近世の条里制に基づいた水田遺構が検出された。以後、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により、河川改修や下水道工事による調査が断続的に実施されており、弥生時代前期以降の複合遺跡であることが認識されるようになった。

今回の調査地は木の本遺跡の東端に位置する。今回の調査地に挟まれるように大阪府教育委員会により中部防災拠点整備事業に伴う発掘調査（府教委防災２次）が実施され、弥生時代前期・古墳時代前期の遺構のほか中世～近世の作土層が確認されている。また、大阪府教育委員会による調査で弥生時代前期の集落跡が検出された田井中遺跡の平成元～６（1990～1995）年度の調査地に隣接する。



第１図　調査地周辺図

2．調査概要

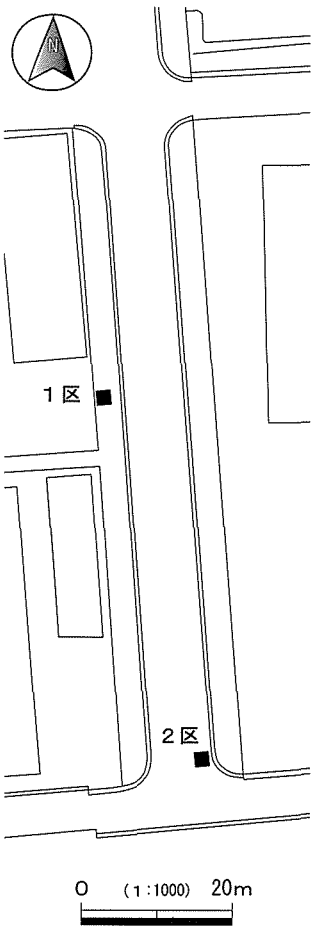
1） 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市空港一丁目地内で実施した下水道工事（26-30工区）に伴う調査で、当調査研究会が木の本遺跡内で行った第29次調査（ＳＫ2015－29）にあたる。

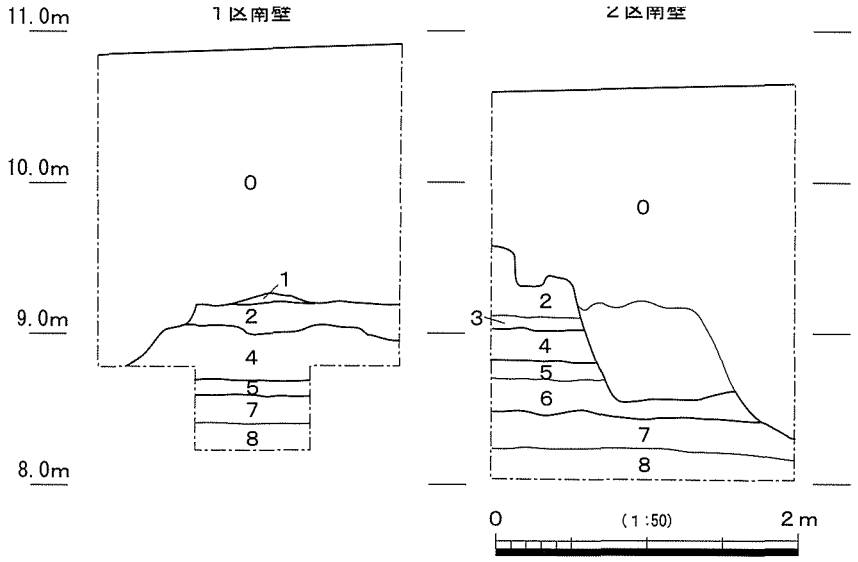
調査対象は人孔部分（規模約2.0×2.0m）２箇所で、総面積は約８㎡を測る。地区名は北から１区・２区とした。調査は工事掘削深度である現地表（T.P.+10.6～10.9m）下2.6～2.7mまでを人力･機械を併用して実施した。調査では、調査区周辺に点在する下水工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。

2） 基本層序

０層は客土・盛土層・撹乱である。１層は１区でのみ認められた氾濫堆積層である。２・３層は近世と考えられる作土層で、３層は２区にのみ遺存する。４層は上方に粗粒化する氾濫堆積層である。５・６層は中世と考えられる作土層で、６層は２区にのみ遺存する。７・８層は湿地性堆積層で、７層には炭酸カルシウム粒が顕著に認められる。各層から遺物は出土しなかった。



第２図　調査区位置図



０：客土・盛土層・撹乱
１：灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂(氾濫堆積層)
２：灰色(5Y4/1)粗粒砂質シルト[１区](近世作土層)
　灰色(5Y6/1)シルト[２区](近世作土層)
３：灰色(5Y5/1)粗粒砂質シルト(近世作土層)
４：灰色(5Y6/1)粗粒砂～極細粒砂(氾濫堆積層)
５：灰色(5Y4/1)シルト(中世作土層)
６：オリーブ黒色(5Y5/2)シルト(中世作土層)
７：炭酸カルシウム粒含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルト(湿地性堆積層)
８：灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト～シルト(湿地性堆積層)

第３図　断面図（Ｓ＝1/50）

３．まとめ

今回の調査では、湿地性堆積層上にて中世の作土層を確認した。さらに上位に氾濫堆積層を介在して近世の作土層を確認したことから、調査地は度重なる氾濫による埋没を繰り返しながら中世以降は耕作域として利用されたことが明らかとなった。古代以前の生活面は今回の調査深度より下位に位置すると考えられる。

【参考文献】

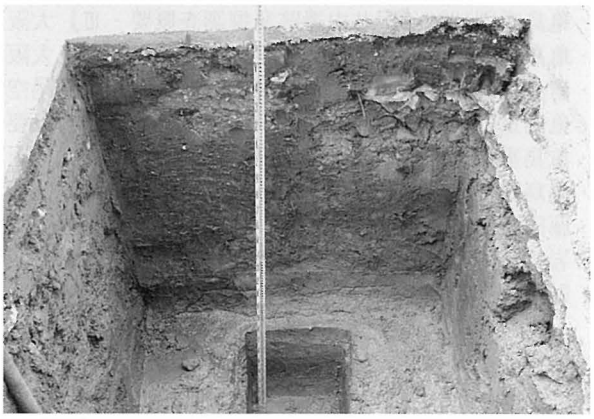
・原田昌則他1984『木の本遺跡－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告４』財団法人八尾市文化財調査研究会
・亀島重則1991『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会
・小林義孝1992『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
・亀島重則1993『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
・亀島重則1994『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ』大阪府教育委員会
・岩瀬透1996『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅴ　八尾空港北濠改修事業に伴う事前発掘調査』大阪府教育委員会
・亀島重則・渡辺正巳1997『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅵ』大阪府教育委員会
・亀島重則1998『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅶ』大阪府教育委員会
・亀島重則・多賀谷昭1999『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅷ』大阪府教育委員会
・藤田道子・安部みき子2000『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅸ』大阪府教育委員会
・岩崎二郎・横田明・山田隆一2004『木の本遺跡　大阪府埋蔵文化財調査報告2003-2』大阪府教育委員会文化財保護課

図版1

調査地全景（南東から）

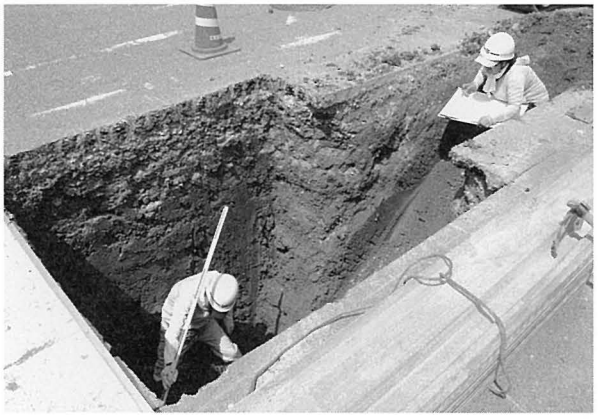
１区全景（南から）

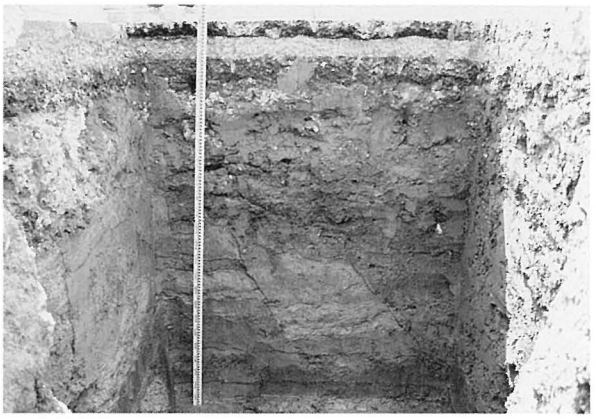
１区機械掘削（南西から）


１区南壁

１区南壁下部

２区全景（北西から）


２区調査風景（南東から）


２区南壁

Ⅶ　郡川遺跡第23次調査（ＫＲ2015－23）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市教興寺五丁目地内で実施した下水道工事（26-18工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する郡川遺跡第23次調査（ＫＲ2015－23）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年６月12日～平成27年７月30日（外業実働６日）に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約22.0㎡である。
1．現地調査においては、飯塚直世・市森千恵子・小野聡美・北垣治男・永井律子・松田逸朗・吉田義男の参加を得た。
1．内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

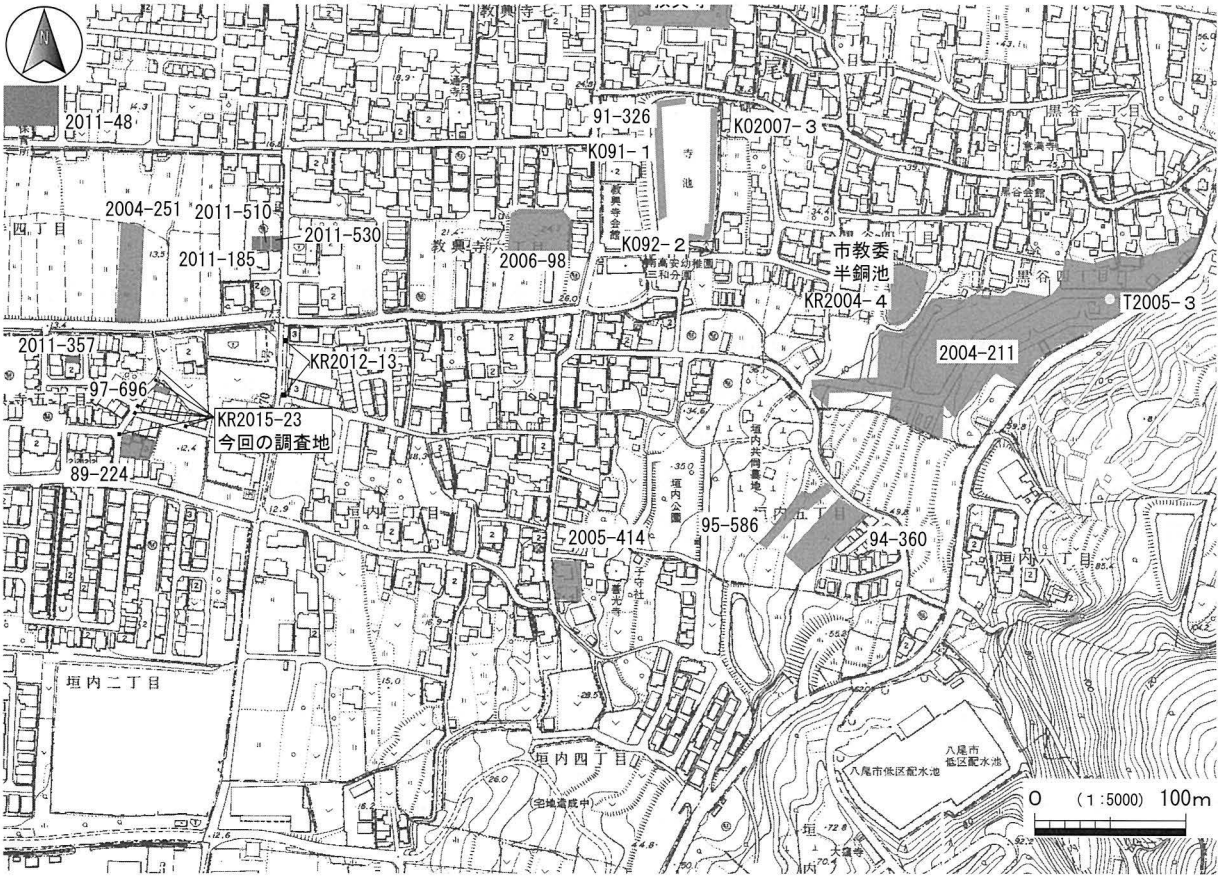
1．はじめに……29
2．調査概要……30
　1）調査の方法と経過……30
　2）基本層序と出土遺物……30
3．まとめ……32

Ⅶ　郡川遺跡第23次調査（ＫＲ2015－23）

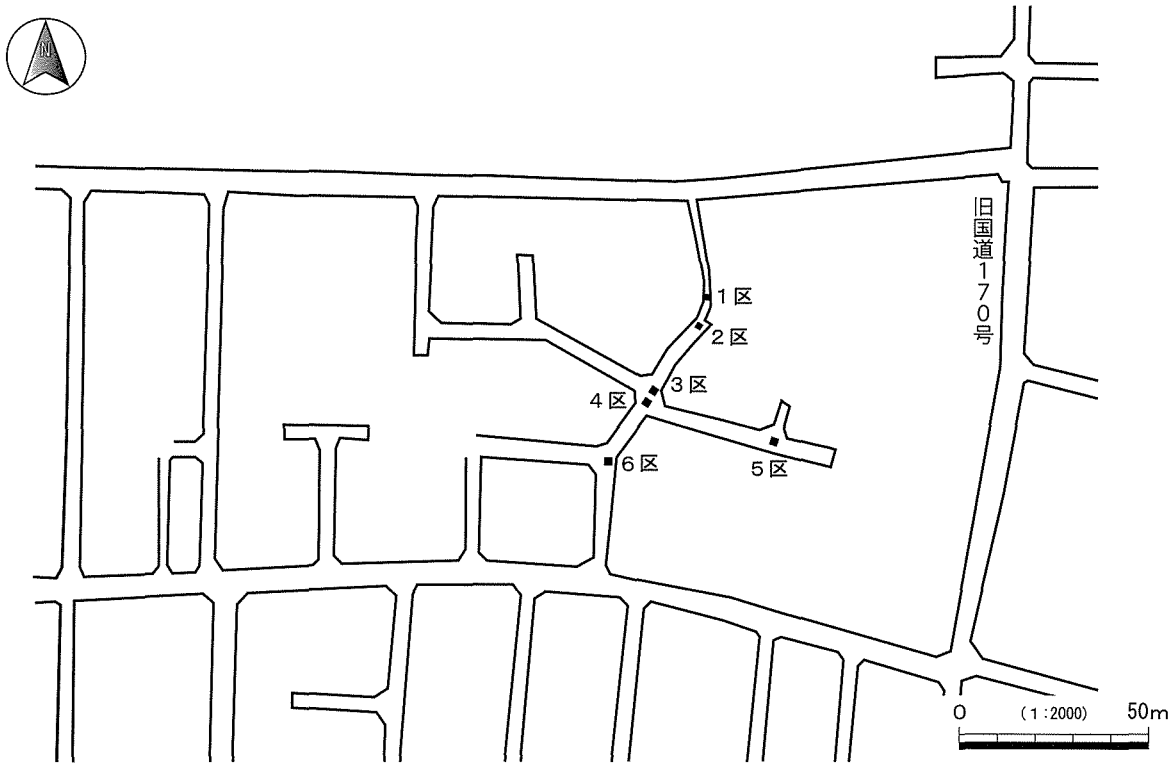
１．はじめに

郡川遺跡は大阪府八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川一～五丁目、教興寺一～七丁目、黒谷一～五丁目、垣内一～五丁目にあたる東西約1.1km・南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.+11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている他、東部には古代寺院である教興寺跡が存在する。

当遺跡では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。最初の発掘調査は、昭和63（1988）年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、当遺跡は南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連綿と続く集落遺跡であると認識されている。



第１図　調査地周辺図



第２図　調査区位置図

今回の調査地東側では、平成元（1989）年度に八尾市教育委員会が遺構確認調査（郡川89－224の調査）を実施しており、古墳時代中期の古墳を検出している。また本地の約70m東の郡川第13次調査では、扇状地性堆積層を確認している。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市教興寺五丁目地内で実施した下水道工事（26-18工区）に伴う調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第23次調査（ＫＲ2015－23）である。

調査地は道路上に設置される人孔部分６箇所（約2.0×2.0m４箇所、約1.6×1.6m２箇所　北から１～６区）で、総面積は約22.0㎡を測る。

調査は現地表（T.P.+12.8～13.6m）下1.9～3.0mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では各調査区周辺に位置する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

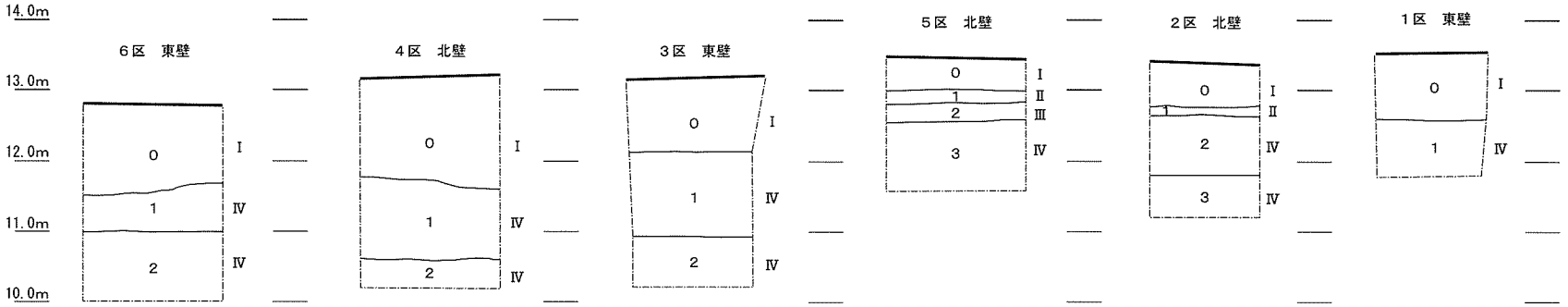
２）基本層序と出土遺物

１区

現地表（T.P.+13.6m）下約1.9mまで調査した。現地表下約0.9m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下1.9mまでの1.0m間において１層の基本層序を確認した。１層は扇状地性堆積層（T.P.+12.6m）である。

２区

現地表（T.P.+13.4m）下約2.2mまで調査した。現地表下約0.6m前後までは現代の整地に伴



6区
I　0：盛土・客土
IV　1：褐色(10YR4/6)細～粗粒砂
(扇状地性堆積層)
IV　2：灰黄褐色(10YR4/2)シルト～細粒砂
(扇状地性堆積層)

4区
I　0：盛土・客土
IV　1：褐色(10YR4/6)細～粗粒砂
(扇状地性堆積層)
IV　2：黒褐色(5YR2/1)礫混粗粒砂
(扇状地性堆積層)

3区
I　0：盛土・客土
IV　1：褐色(10YR4/6)シルト～細粒砂
(扇状地性堆積層)
IV　2：灰色(10Y4/1)礫混粗粒砂
(扇状地性堆積層)

5区
I　0：盛土・客土
II　1：黒色(5Y2/1)細粒砂混粘土
(旧作土層)
III　2：灰色(5Y4/1)細粒砂混粘土
(作土層)
IV　3：暗褐色(10YR3/4)礫混粗粒砂
(扇状地性堆積層)

2区
I　0：盛土・客土
II　1：オリーブ黒色(5B3/1)細粒砂混粘土
(旧作土層)
IV　2：暗褐色(10YR3/4)粗粒砂
(扇状地性堆積層)
IV　3：青黒色(10BG2/1)シルト
(扇状地性堆積層)

1区
I　0：盛土・客土
IV　1：暗褐色(10YR3/4)礫混粗粒砂
(扇状地性堆積層)

基本層序
I　盛土層
II　旧作土層
III　近世以前作土層
IV　扇状地性堆積層

0　(1:100)　5m

第3図　断面図

う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下2.2mまでの1.6m間において３層の基本層序を確認した。１層は旧作土層（T.P.+12.8m）である。２・３層は扇状地性堆積層（２層：T.P.+12.6m　３層：T.P.+11.8m）である。

３区

現地表（T.P.+13.2m）下約3.0mまで調査した。現地表下約1.1m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下3.0mまでの1.9m間において２層の基本層序を確認した。１・２層は扇状地性堆積層（１層：T.P.+12.1m　２層：T.P.+10.9m）である。

４区

現地表（T.P.+13.2m）下約3.0mまで調査した。現地表下約1.3m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下3.0mまでの1.7m間において２層の基本層序を確認した。１・２層は扇状地性堆積層（１層：T.P.+11.9m　２層：T.P.+10.6m）である。

５区

現地表（T.P.+13.5m）下約1.9mまで調査した。現地表下約0.5m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下1.9mまでの1.5m間において３層の基本層序を確認した。１層は旧作土層（T.P.+13.0m）である。２層は近世以前の作土層（T.P.+12.8m）である。３層は扇状地性堆積層（T.P.+12.6m）である。

６区

現地表（T.P.+12.8m）下約2.8mまで調査した。現地表下約1.1m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下2.8mまでの1.7m間において２層の基本層序を確認した。１・２層は扇状地性堆積層（１層：T.P.+11.7m　２層：T.P.+11.0m）である。

３．まとめ

１～６区の扇状地性堆積層は、東約100mで実施した郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012-13）でも確認しており、本地一帯は谷にあたる可能性が考えられる。また、５区では近世以前に比定できる作土層を確認したことから、同区の周辺には生産域が広がっていたと推測できる。

６区の東側約10mの郡川89－224調査地では、古墳時代中期（５世紀後葉）の古墳（塚本塚古墳）に伴う周溝を検出し、下層では弥生時代後期の遺物包含層を確認しているが、当該期の遺構・遺物は、本地では皆無であった。

【参考文献】
・青木勘時1990「７.郡川遺跡（89-224）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告20　平成元年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・西村公助2013「Ⅲ恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）　郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012-13）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

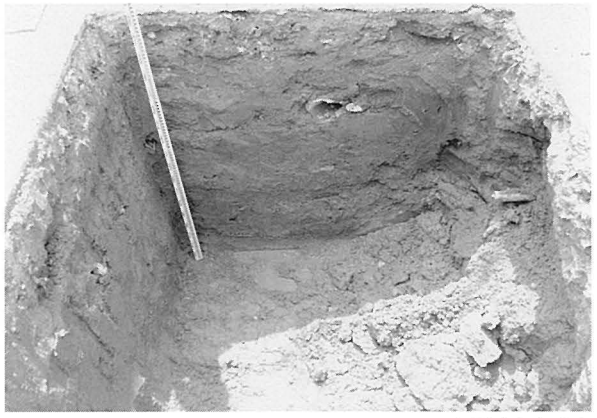
調査地周辺（北西から）

調査地周辺（南から）

１区全景（西から）

２区全景（南から）

３区全景（西から）



４区全景（南から）

５区全景（南から）

６区全景（西から）

Ⅷ　郡川遺跡第24次調査（ＫＲ2015－24）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市教興寺七丁目・黒谷一丁目・黒谷三丁目地内で実施した下水道工事（26-37工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する郡川遺跡第24次調査（ＫＲ2015－24）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年９月７日～平成27年10月９日（外業実働５日）に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約18.0㎡である。
1．現地調査においては、稲葉敬子・北垣治男・國津玲子・百々勝弘・松田逸朗・村田知子・吉田義男の参加を得た。
1．内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

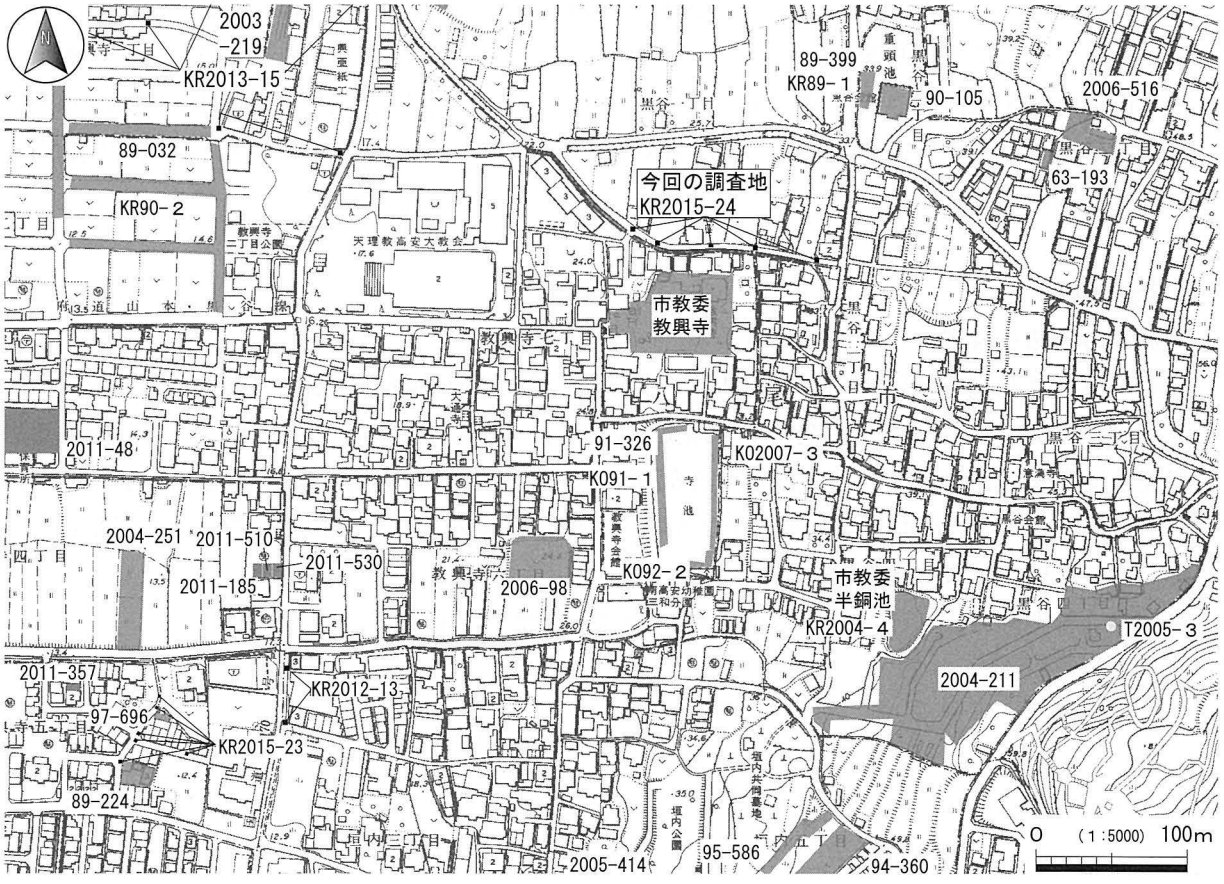
1．はじめに……35
2．調査概要……36
　1）調査の方法と経過……36
　2）基本層序と出土遺物……36
3．まとめ……38

Ⅷ　郡川遺跡第24次調査（ＫＲ2015－24）

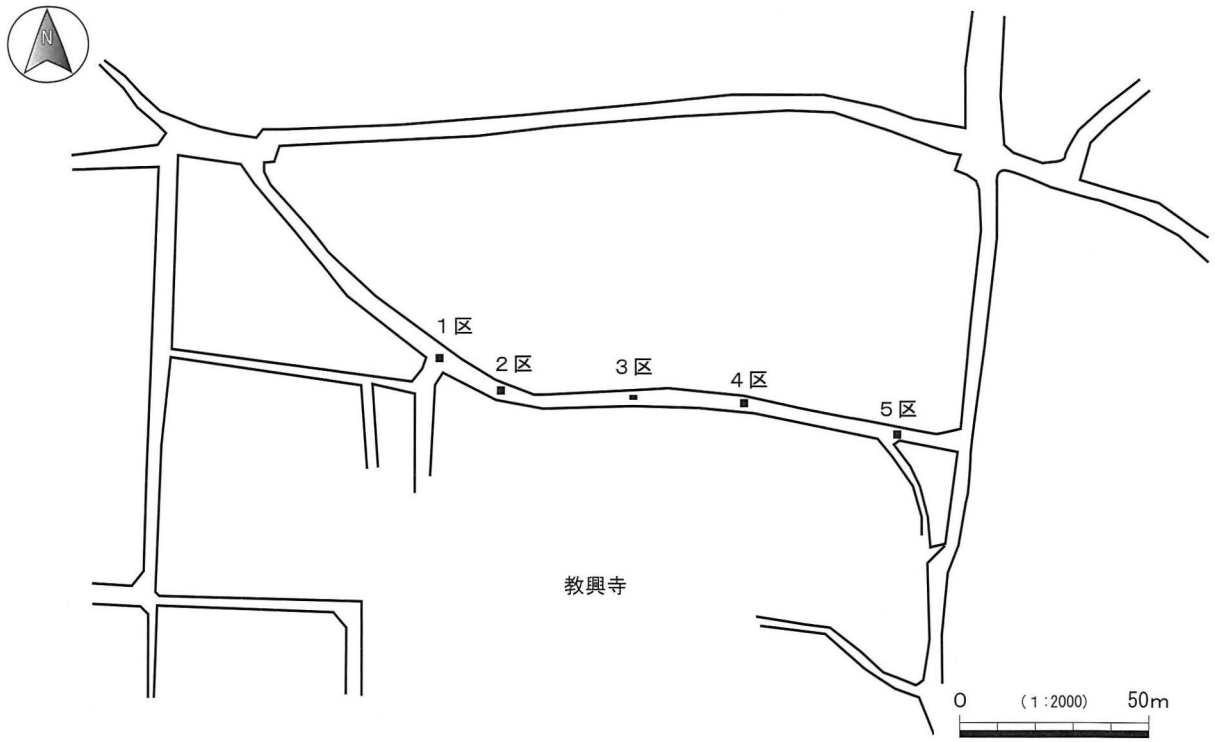
１．はじめに

郡川遺跡は大阪府八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川一～五丁目、教興寺一～七丁目、黒谷一～五丁目、垣内一～五丁目にあたる東西約1.1km、南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.+11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている他、東部には古代寺院である教興寺跡が存在する。

当遺跡では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。最初の発掘調査は、昭和63（1988）年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、当遺跡は南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連綿と続く集落遺跡であると認識されている。



第１図　調査地周辺図



第２図　調査区位置図

今回の調査地の北東部約150mでは、昭和63（1988）年度に郡川63－193調査が実施され、古墳時代中～後期の遺構や遺物を確認し、居住域の存在が判明した。また郡川63－193の西約150mでは、郡川遺跡第１次調査（ＫＲ89－１）が実施されており、同時代の居住域の西への広がりを確認している。両調査地では須恵器とともに鞴の羽口が出土しており、鍛冶を行っていた可能性が高いと考えられている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市教興寺七丁目・黒谷一丁目・黒谷三丁目地内で実施した下水道工事（26-37工区）に伴う調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第24次調査（ＫＲ2015－24）である。

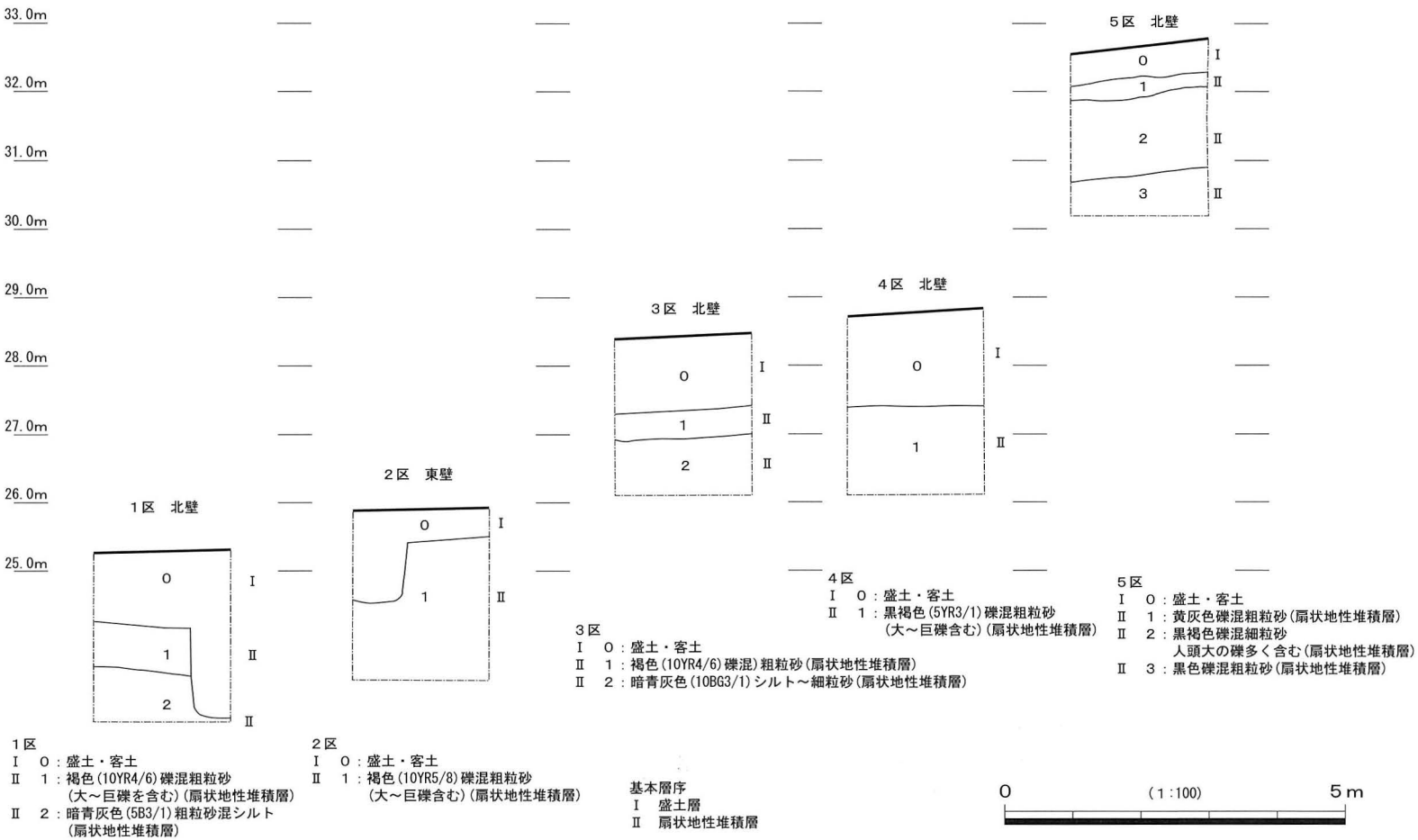
調査地は道路上に設置される人孔部分５箇所（約2.0×2.0m４箇所、約1.0×2.0m１箇所　西から１～５区）で、調査面積は約18.0㎡である。調査は現地表（T.P.+ 25.3～32.8m）下2.4～2.7mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では各調査区周辺に位置する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序

１区

現地表（T.P.+25.3m）下約2.5mまで調査した。現地表下約1.1m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下2.5mまでの1.4m間において２層の基本層序を確認した。１・２層は扇状地性堆積層（１層：T.P.+24.3m　２層：T.P.+23.0m）である。


33.0m
32.0m
31.0m
30.0m
29.0m
28.0m
27.0m
26.0m
25.0m
1区　北壁
0
1
2
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱ
2区　東壁
0
1
Ⅰ
Ⅱ
3区　北壁
0
1
2
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱ
4区　北壁
0
1
Ⅰ
Ⅱ
5区　北壁
0
1
2
3
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱ
Ⅱ
1区
Ⅰ　0：盛土・客土
Ⅱ　1：褐色(10YR4/6)礫混粗粒砂
(大～巨礫を含む)(扇状地性堆積層)
Ⅱ　2：暗青灰色(5B3/1)粗粒砂混シルト
(扇状地性堆積層)
2区
Ⅰ　0：盛土・客土
Ⅱ　1：褐色(10YR5/8)礫混粗粒砂
(大～巨礫含む)(扇状地性堆積層)
3区
Ⅰ　0：盛土・客土
Ⅱ　1：褐色(10YR4/6)礫混)粗粒砂(扇状地性堆積層)
Ⅱ　2：暗青灰色(10BG3/1)シルト～細粒砂(扇状地性堆積層)
4区
Ⅰ　0：盛土・客土
Ⅱ　1：黒褐色(5YR3/1)礫混粗粒砂
(大～巨礫含む)(扇状地性堆積層)
5区
Ⅰ　0：盛土・客土
Ⅱ　1：黄灰色礫混粗粒砂(扇状地性堆積層)
Ⅱ　2：黒褐色礫混細粒砂
人頭大の礫多く含む(扇状地性堆積層)
Ⅱ　3：黒色礫混粗粒砂(扇状地性堆積層)
基本層序
Ⅰ　盛土層
Ⅱ　扇状地性堆積層
0
(1:100)
5m

第３図　断面図

２区

現地表（T.P.+25.9m）下約2.5mまで調査した。現地表下約0.5～1.4m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下2.5mまでの1.1～2.0m間において１層の基本層序を確認した。１層は扇状地性堆積層（T.P.+25.5m）である。

３区

現地表（T.P.+27.5m）下約2.4mまで調査した。現地表下約1.1m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下2.4mまでの1.3m間において２層の基本層序を確認した。１・２層は扇状地性堆積層（１層：T.P.+26.3m　２層：T.P.+25.9m）である。

４区

現地表（T.P.+28.8m）下約2.7mまで調査した。現地表下約1.4m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下2.7mまでの1.3m間において１層の基本層序を確認した。１層は扇状地性堆積層（T.P.+27.4m）である。

５区

現地表（T.P.+32.8m）下約2.6mまで調査した。現地表下約0.5m前後までは現代の整地に伴う盛土・客土層（０層）である。以下現地表下2.6mまでの2.1m間において３層の基本層序を確認した。１～３層は扇状地性堆積層（１層：T.P.+32.3m　２層：T.P.+32.1m　１層：T.P.+30.9m）である。

３．まとめ

１～５区では、盛土・客土層直下で扇状地性堆積層を確認したことから、本地一帯は谷地形であった可能性が高くなった。北東約150mの郡川63－193調査地（ＫＲ89-１）および北約100mの郡川遺跡第１次調査地では、古墳時代中～後期の遺構や遺物が確認されているが、当該期の遺物は、本地では皆無であった。

【参考文献】

・近江俊秀1989「15.郡川遺跡（63－193）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告19　昭和63年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・原田昌則1997「Ⅱ　郡川遺跡第１次調査（ＫＲ89－１）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

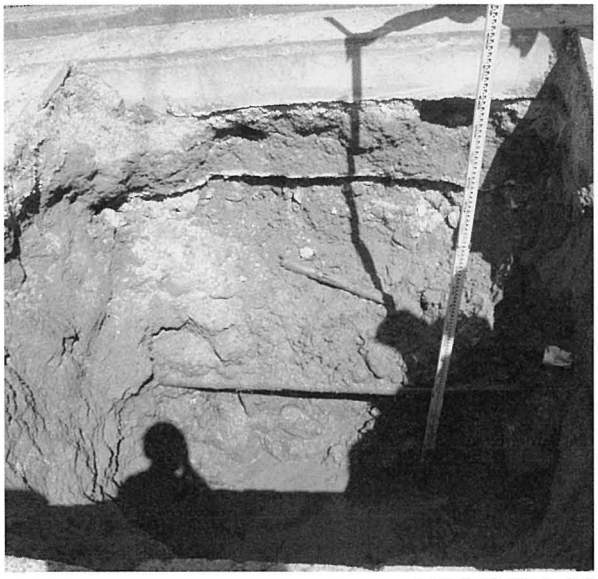
図版1

調査地周辺（北西から）

１区全景（南から）

２区全景（西から）

３区全景（南から）



４区全景（南から）

５区全景（南から）

IX　神宮寺遺跡第３次調査（ＺＧ2014－３）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市神宮寺五丁目地内で実施した下水道工事（25-212工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する神宮寺遺跡第３次調査（ＺＧ2014－３）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年２月27日～平成27年３月24日（外業実働３日）に、西村公助・平田洋司を調査担当者として実施した。調査面積は約11.0㎡である。
1．現地調査においては小野聡美・國津玲子・百々勝弘の参加を得た。
1．内業整理業務は西村・平田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……41
2．調査概要……42
　1）調査の方法と経過……42
　2）基本層序……42
　3）検出遺構と出土遺物……42
3．まとめ……43

Ⅸ　神宮寺遺跡第３次調査（ＺＧ2014－３）

１．はじめに

神宮寺遺跡は、八尾市南東部に位置する弥生時代～中世の複合遺跡である。現在の行政区画では神宮寺三～五丁目にあたり、東西約0.7km、南北約0.3kmがその範囲とされている。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では北側に恩智遺跡、東側に高安古墳群が位置する他、南側の柏原市域においては弥生時代以降の集落遺跡である山ノ井遺跡や奈良時代の大県郡条里遺構が隣接し、西側には玉串川の氾濫原が広がっている。また遺跡範囲の中央付近を東高野街道が縦断している。

今回の調査地の東約50ｍで実施した第１次調査（ＺＧ93－1）では、弥生時代中期～室町時代の遺構・遺物が多く検出されており、弥生時代中期の土器棺墓からなる墓域の確認や、室町時代の石組井戸は特筆される。また、東隣で実施した分譲住宅建設に伴う神宮寺2011－92・2011－275・2011－386・2011－435・2011－473・2011－519・2011－529・2012－３・2012－79・2012－208・2013－163・2013－165の調査では、弥生時代中期～古墳時代の遺構や遺物を確認している。さらに、南部の府教委1994の調査では、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。これらの調査地は東高野街道沿いに位置しており、この付近では同時期の集落の存在が明らかになっている。

第１図　調査地周辺図

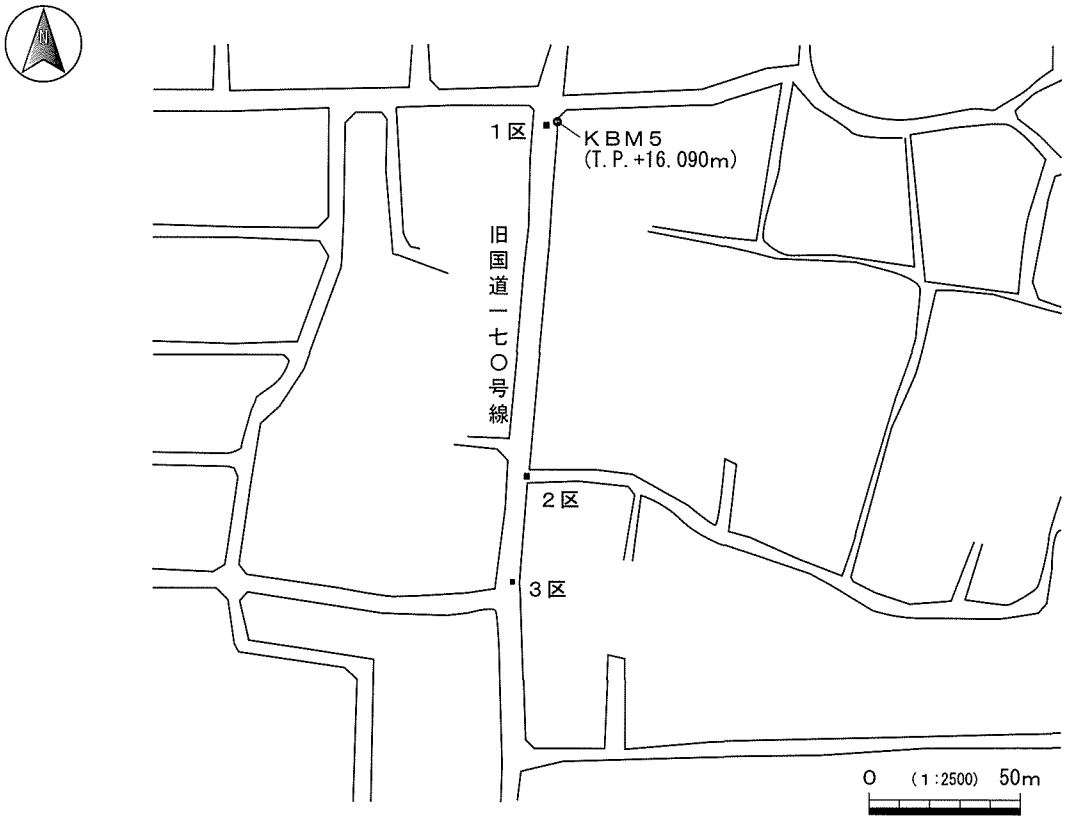
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市神宮寺五丁目地内で実施された下水道工事（25-212工区）に伴う調査で、当調査研究会が神宮寺遺跡内で行った第３次調査（ＺＧ2014－３）である。

調査地は、国道170号線（東高野街道）の道路上に位置する人孔部分３箇所（北から１～３区）で、調査面積は約11㎡である。

調査は工事掘削深度である現地表（約T.P.＋ 15.8～16.2m）下3.0mまで機械・人力掘削併用で実施した。調査では、調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

２）基本層序

１区

０層は客土・盛土層である。１層は旧作土層、２・３層は湿地性堆積層である。４～６層は扇状地性堆積層である。

２区

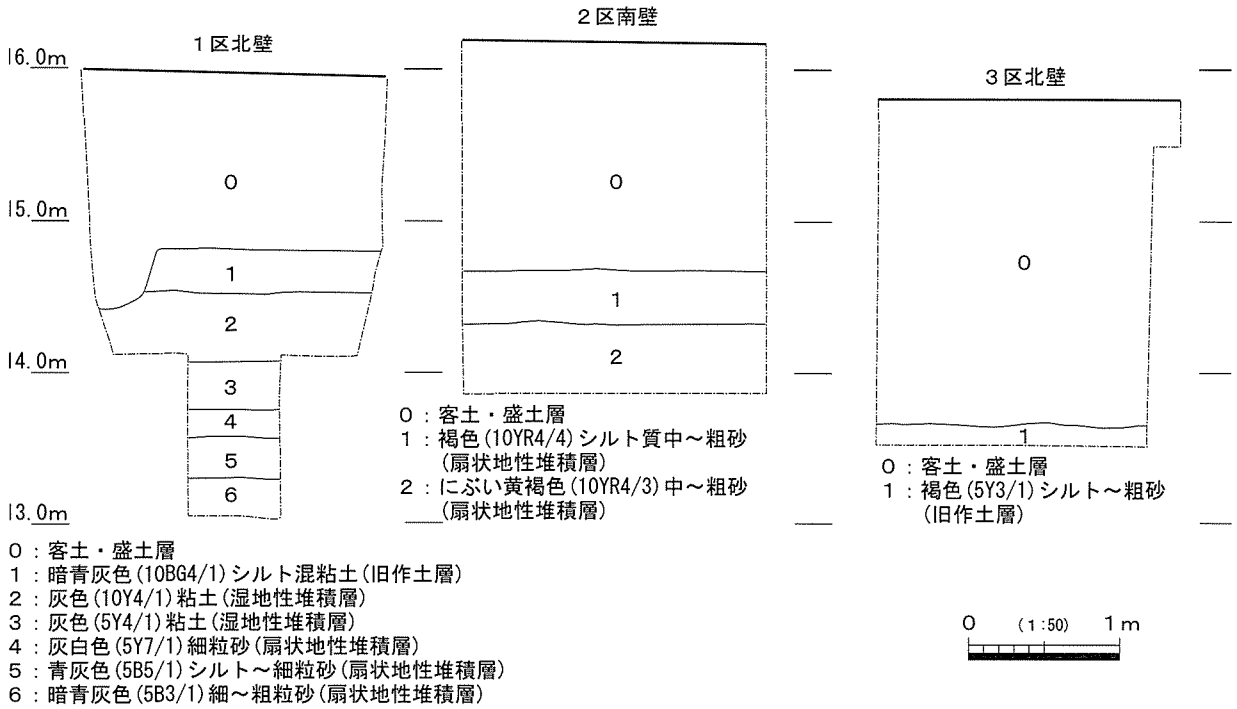
０層は客土・盛土層である。１・２層は扇状地性堆積層である。

３区

０層は客土・盛土層である。１層は旧作土層である。

３）検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は認められなかった。



0：客土・盛土層
1：暗青灰色(10BG4/1)シルト混粘土(旧作土層)
2：灰色(10Y4/1)粘土(湿地性堆積層)
3：灰色(5Y4/1)粘土(湿地性堆積層)
4：灰白色(5Y7/1)細粒砂(扇状地性堆積層)
5：青灰色(5B5/1)シルト～細粒砂(扇状地性堆積層)
6：暗青灰色(5B3/1)細～粗粒砂(扇状地性堆積層)

第３図　断面図

３．まとめ

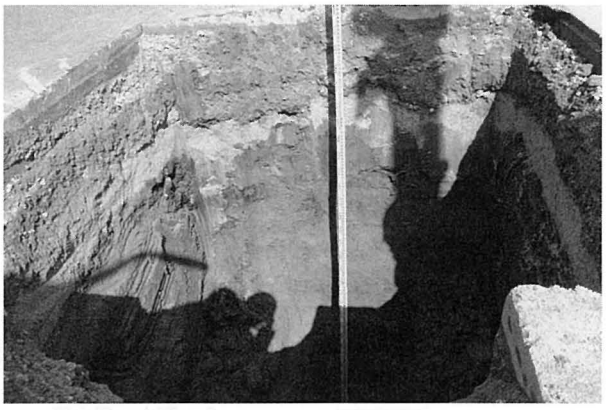
今回の調査では、湿地性堆積層と扇状地性堆積層を確認し、本地は谷にあたると推測される。近隣の神宮寺2011－519・529では、古墳時代中期の遺構を、また、神宮寺2011－92・386・435では、弥生時代中期と同後期の遺構および遺物を検出している。さらに神宮寺第１次調査地（ＺＧ93－１）では、弥生時代中期の土器棺墓、室町時代の石組井戸を確認している。しかし本地では遺構および遺物は皆無であり、同時期の居住域及び墓域は、西側へ広がらない可能性が高くなった。

【参考文献】

・山上　弘1994『神宮寺跡発掘調査概要－八尾市神宮寺４丁目所在－』大阪府教育委員会
・岡田清一1997「Ⅲ　神宮寺遺跡第１次調査（ＺＧ93－１）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫2012「21）神宮寺遺跡（2011－92・386・435の調査」「神宮寺2011－275」『八尾市内遺跡平成23度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告69　平成23年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・樋口　薫2013「神宮寺2011－473」「６）神宮寺遺跡（2011－519・529）の調査」「神宮寺2012－３」「21）神宮寺遺跡（2012－79・208）の調査」『八尾市内遺跡平成24度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告70　平成24年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・樋口　薫2014「神宮寺2013－163」「神宮寺2013－165」『八尾市内遺跡平成25度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告72　平成25年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

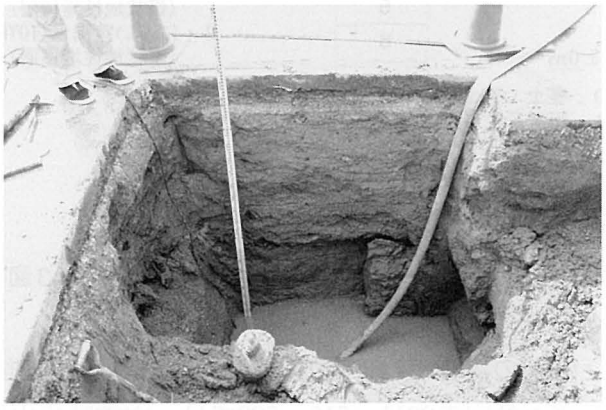
図版1

1区周辺（北西から）



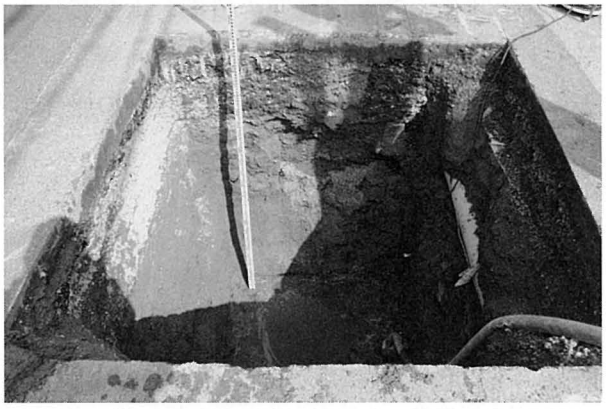
1区全景　（南から）

2区周辺（東から）



2区全景（北から）

3区周辺（北西から）



3区全景（南から）

X　水越遺跡第21次調査(ＭＫ2015－21)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市千塚二丁目地内で実施した下水道工事（27-18工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する水越遺跡第21次調査（ＭＫ2015－21）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年８月17日～平成27年９月28日（外業実働11日：その内夜間調査３日）に、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約81.0㎡である。
1．現地調査においては、稲葉敬子・垣内洋平・北垣治男・百々勝弘・松田逸郎・吉田義男の参加を得た。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月31日をもって終了した。
　デジタルトレース－樋口・李　聖子
1．本書の執筆・編集は樋口が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……45
2．調査概要……46
　1）調査の方法と経過……46
　2）基本層序……49
　3）検出遺構と出土遺物……49
3．まとめ……49

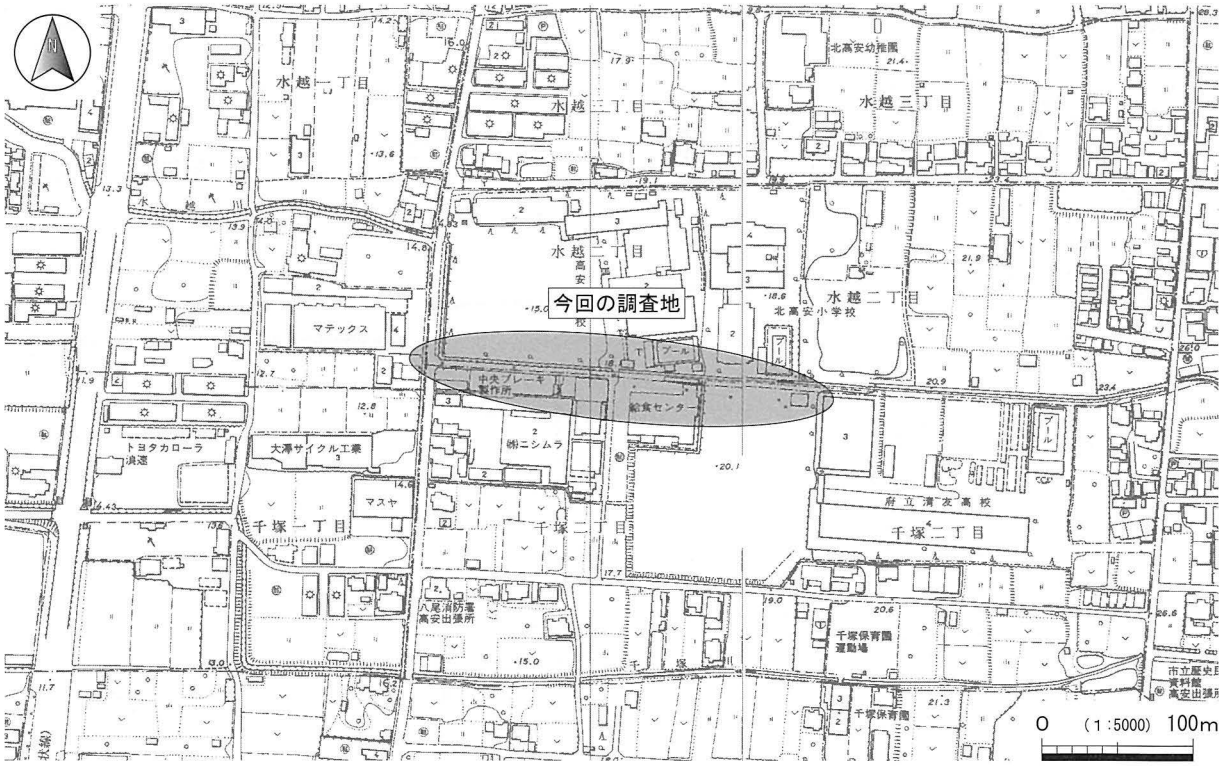
X　水越遺跡第21次調査（MK 2015 － 21）

1．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する水越遺跡は、八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安一丁目、水越二・五・七丁目、千塚一～三丁目、服部川一～七丁目、神立一丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川の東西約1.25km、南北約1.2kmがその範囲と推定されている。地形的には、生駒山地西麓部を西流する小河川により形成された扇状地から扇状地性低地（標高12～55m）に展開する遺跡である。遺跡の西側には、旧大和川の主流であった恩智川や玉串川の氾濫原が拡がっている。

本遺跡は、大正９（1920）年、清原得巌氏によって石鏃が採集されたことに端を発する。その後、昭和５（1930）年には、勾玉研磨用の砥石をはじめ滑石製小玉や管玉の未完成品といった石製品が表採されたほか、昭和９（1934）年には東高野街道（現、旧国道170号線）の改修工事が行われ、現地表下0.6m付近に堆積する黒褐色を呈した地層から弥生時代後期に帰属する土器が発見された。

昭和53（1978）年 、本遺跡内で初となる本格的な調査（府立清友高校新設工事に伴う発掘調査）が大阪府教育委員会により行われ、縄文時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。特に弥生時代～古墳時代にかけては、井戸や溝のほか、方形周溝墓や土器棺墓から成る墓域が検出された。また古墳時代中期については、玉作りに関連する遺跡であったことを示唆する滑石製管玉の未完



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１/5000）

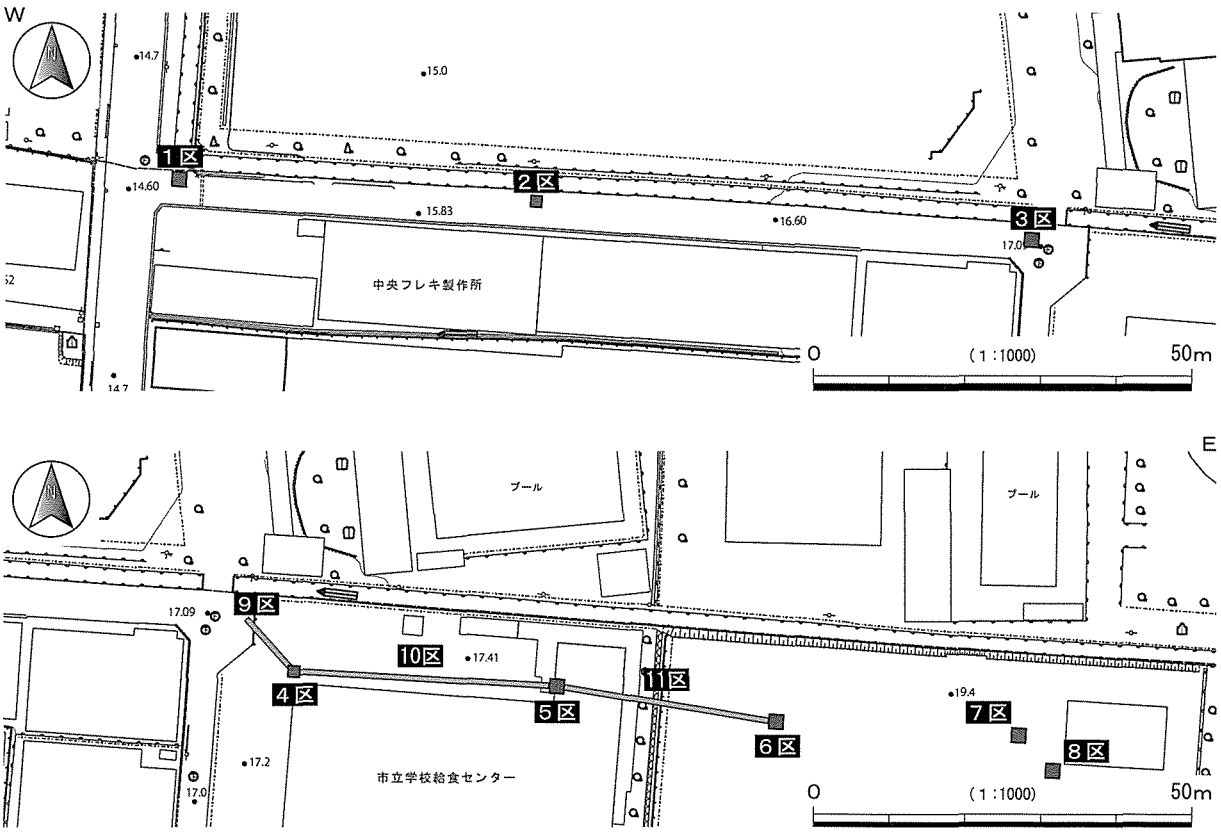
成品などの石製品が多く出土し、本遺跡の東部に鎮座する式内社玉祖神社との有機的な関係を彷彿させる成果が得られた。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会による試掘調査や数次に亘る本調査が行われ、縄文時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されるようになってきた。

本遺跡を含む生駒山地西麓部には、多くの遺跡が分布する。北には、弥生時代後期初頭の鋳造鉄剣や古墳時代前期の瑪瑙製鏃形石製品を出土した大竹西遺跡をはじめ、大竹遺跡、太田川遺跡などの縄文時代以降の複合遺跡が展開するほか、古墳時代中期前半に造営された中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳（墳丘長160m以上）や中期後半に比定される鏡塚古墳（径約28mの円墳または前方後円墳と推定される）が知られる。東を見ると、生駒山地尾根上には、古墳時代後期以降に築造された高安古墳群（200基以上）が群集している。南には、高安古墳群にさきがけて横穴式石室を採用し、盟主的な役割を担ったことが推測される郡川西塚古墳・東塚古墳が、南北を貫く東高野街道を挟んで東西に対峙している。時代が下ると、本遺跡の南端付近において郡川廃寺（高麗寺跡：奈良時代前期～鎌倉時代）の建立が推測されるが、詳細は分かっていない。

2．調査概要

1）調査の方法と経過

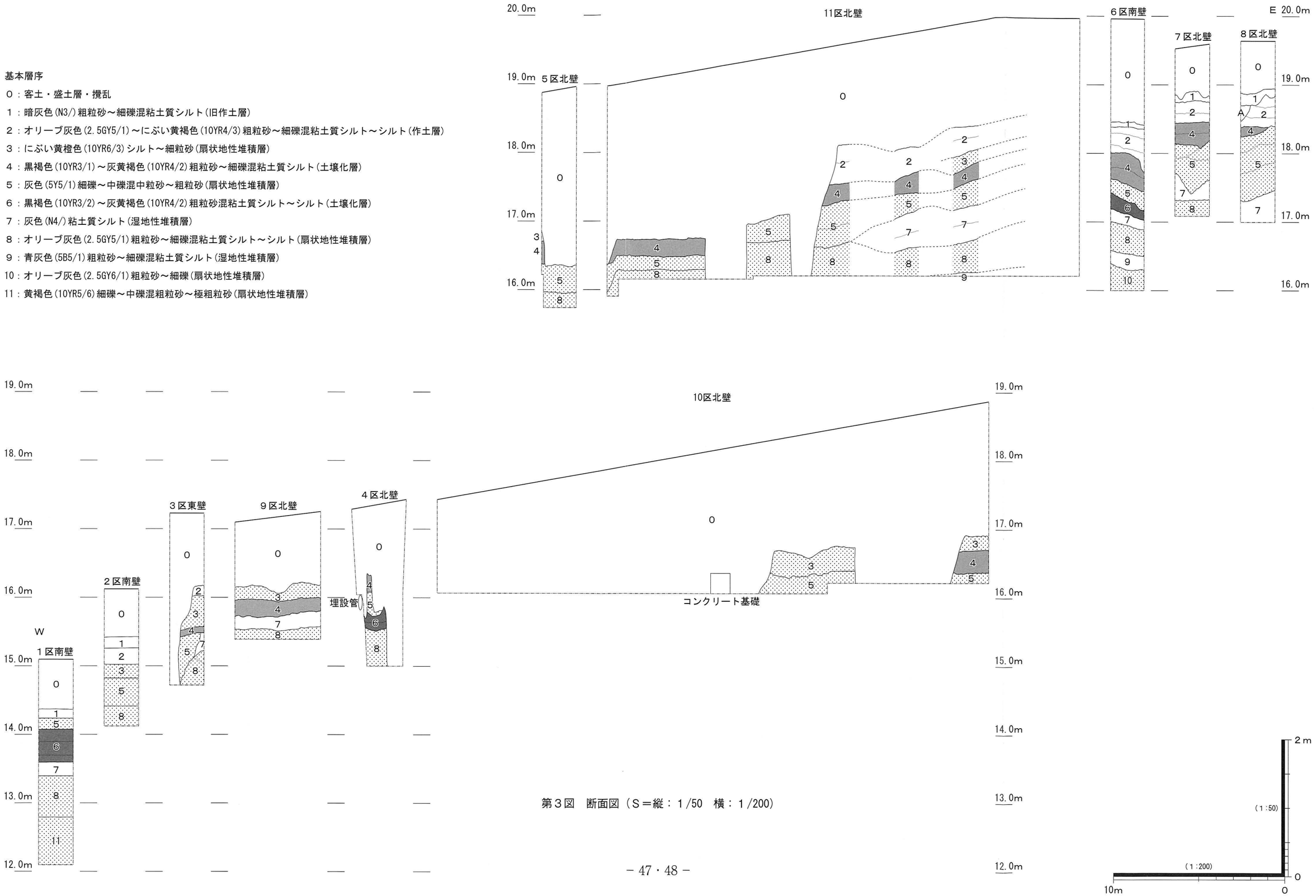
今回の発掘調査は八尾市千塚二丁目地内で実施した下水道工事（27-18工区）に伴うもので、当研究会が水越遺跡で実施した第21次調査（ＭＫ2015－21）にあたる。調査区は人孔部分８箇所（西から１～８区）、開削部分３箇所（９～11区）で、調査総面積は約81.0㎡を測る。調査は、八



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１/1000）

基本層序

０：客土・盛土層・攪乱
１：暗灰色(N3/)粗粒砂～細礫混粘土質シルト(旧作土層)
２：オリーブ灰色(2.5GY5/1)～にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト(作土層)
３：にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト～細粒砂(扇状地性堆積層)
４：黒褐色(10YR3/1)～灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂～細礫混粘土質シルト(土壌化層)
５：灰色(5Y5/1)細礫～中礫混中粒砂～粗粒砂(扇状地性堆積層)
６：黒褐色(10YR3/2)～灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂混粘土質シルト～シルト(土壌化層)
７：灰色(N4/)粘土質シルト(湿地性堆積層)
８：オリーブ灰色(2.5GY5/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト(扇状地性堆積層)
９：青灰色(5B5/1)粗粒砂～細礫混粘土質シルト(湿地性堆積層)
10：オリーブ灰色(2.5GY6/1)粗粒砂～細礫(扇状地性堆積層)
11：黄褐色(10YR5/6)細礫～中礫混粗粒砂～極粗粒砂(扇状地性堆積層)



第３図　断面図（Ｓ＝縦：１/50　横：１/200）

尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表（１区：T.P.+15.1m　２区：T.P.+16.1m　３区:T.P.+17.2m　４区:T.P.+17.3m　５区:T.P.+18.9m　６区:T.P.+20.0m　７区:T.P.+19.5m　８区：T.P.+19.6m　９区：T.P.+17.1～17.2m　10区：T.P.+17.3～18.8m　11区：T.P.+19.0～20.0m）下1.8～4.0m前後までを人力と機械を併用しながら掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。なお、１～３区は夜間に調査を実施した。

調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3C114（調査地中央付近：T.P.+17.210m）である。

２）基本層序

現地表下0.6～3.1mまでは客土・盛土層・攪乱（０層）である。以下現地表下1.8～4.0mまでで、11層の基本層序を確認した。１層は、１・２・６～８区で確認した旧作土層（T.P.+14.4～～19.0m）である。２層は、２・３・６～８・11区で確認した作土層（T.P.+15.4～18.8m）である。中世以降に比定される。３層は、1・３・５・９～11区で確認した扇状地性堆積層(T.P.+14.2～18.1m）である。４層は、３～11区で確認した土壌化層（T.P.+15.5～18.4m）である。６・７区では２層に細分できた。５層は１～８・10・11区で確認した扇状地性堆積層（T.P.+14.2～18.4m）である。６層は、１・４・６区で確認した土壌化層（T.P.+14.1～17.4m）である。１区では３層に細分できた。７層は、１・３・６～９・11区で確認した湿地性堆積層（T.P.+13.6～17.7m）である。８層は、１～７・９・11区で確認した扇状地性堆積層（T.P.+13.4～17.3m）である。９層は、６・11区で確認した湿地性堆積層（T.P.+16.2～16.6m）である。10層は、６区で確認した扇状地性堆積層（T.P.+16.4m以下）である。11層は、１区で確認した扇状地性堆積層（T.P.+12.8m以下）で、土石流に伴う堆積層の可能性がある。

３）検出遺構と出土遺物

検出遺構はなし。出土遺物は、６・11区４層から弥生土器あるいは古式土師器と推測される土器片が少量出土したほか、１区６層からは古式土師器細片が出土した。いずれも図化は不可。

３．まとめ

今回の調査では、水越遺跡北部を東西に約230m横断するように調査区が設定された結果、地形環境の推移を復元する上で、貴重な成果を得ることができた。一つは、現地形が示すように、各時代を通じて、東が高く西が低い地形であることが明らかになった。二つは、数回にわたる扇状地性堆積層の影響を受けながらも、４層・６層といった二時期の土壌化層が形成されたことを明らかにした。この内６層については、１区で古式土師器細片が混在していたことから、古墳時代前期以前の対応層の可能性が高くなった。一方、４層については、今年度実施された第20次調査で確認された古墳時代中期の遺物包含層と層準が類似することから、帰属時期は古墳時代中期の可能性が考えられる。周辺で調査が行われる際には、この二層の土壌化層の存在に注意する必要があろう。

【参考文献】

・大阪府教育委員会1978『府立清友高等学校新築工事に伴う発掘調査現地説明会資料』
・吉岡　哲1988「河内の玉作遺跡－本校敷地周辺の遺跡とその性格－」『紀要「清友」第１号』大阪府立清友高等学校

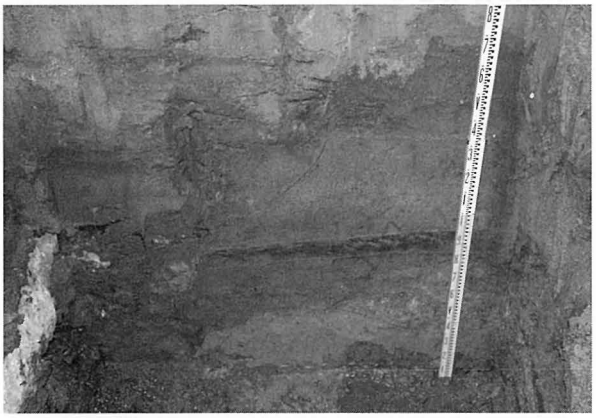
図版1

1～3区周辺状況（西から）

10区周辺状況（西から）

1区南壁（北から）

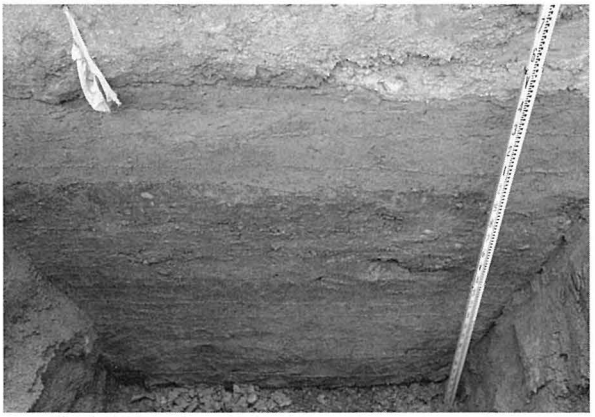
2区南壁（北東から）



3区東壁（西から）

4区北壁（南から）

5区北壁（南から）



6区南壁（北から）

７・８区周辺状況（北東から）

11区周辺状況（西から）

７区北壁（南から）

８区北壁（南から）

９区北壁（南から）

10区北壁（南西から）

11区西方北壁（南西から）

11区東方北壁（南から）

XI　水越遺跡第24次調査(ＭＫ2015－24)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市服部川六丁目地内で実施した下水道工事（27-34工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する水越遺跡第24次調査（ＭＫ2015－24）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年11月24日～平成27年12月18日（外業実働４日）に岡本武司・平田洋司を調査担当者として実施した。調査面積は約14.0㎡である。
1．現地調査においては稲葉敬子・垣内洋平・百々勝弘・村田知子・吉田義男の参加を得た。
1．内業整理業務は岡本・平田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成28年３月31日に完了した。
1．本書の執筆は岡本が行い、編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……53
2．調査概要……54
　1）調査の方法と経過……54
　2）基本層序……55
　3）検出遺構と出土遺物……56
3．まとめ……57

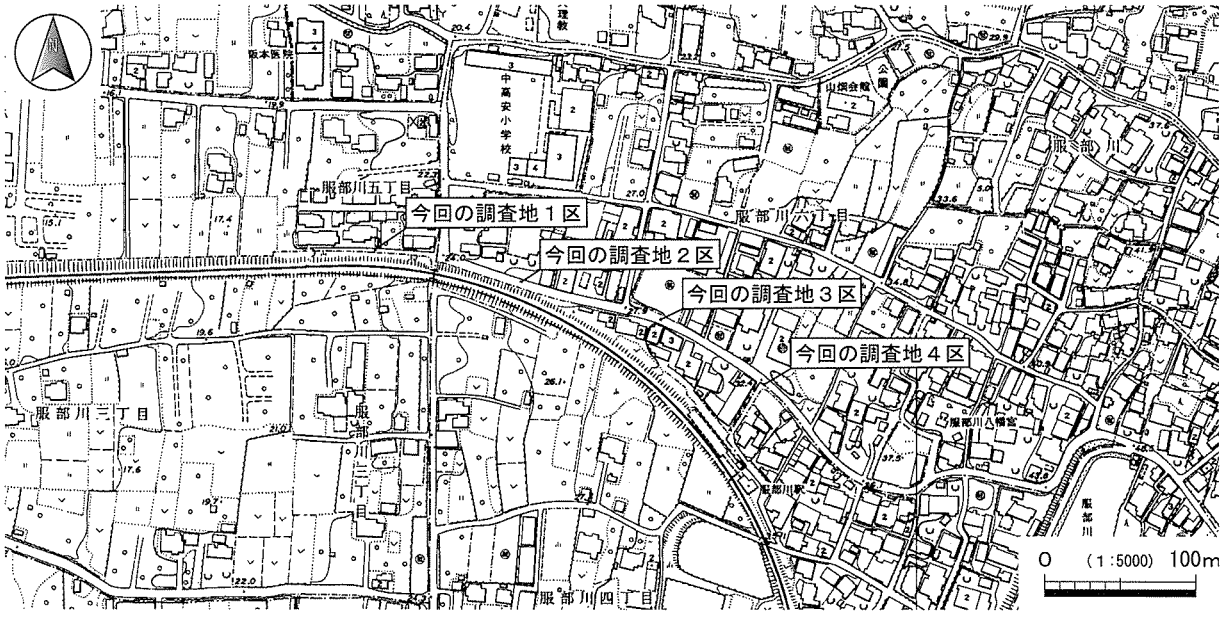
XI　水越遺跡第24次調査（MK2015－24）

1．はじめに

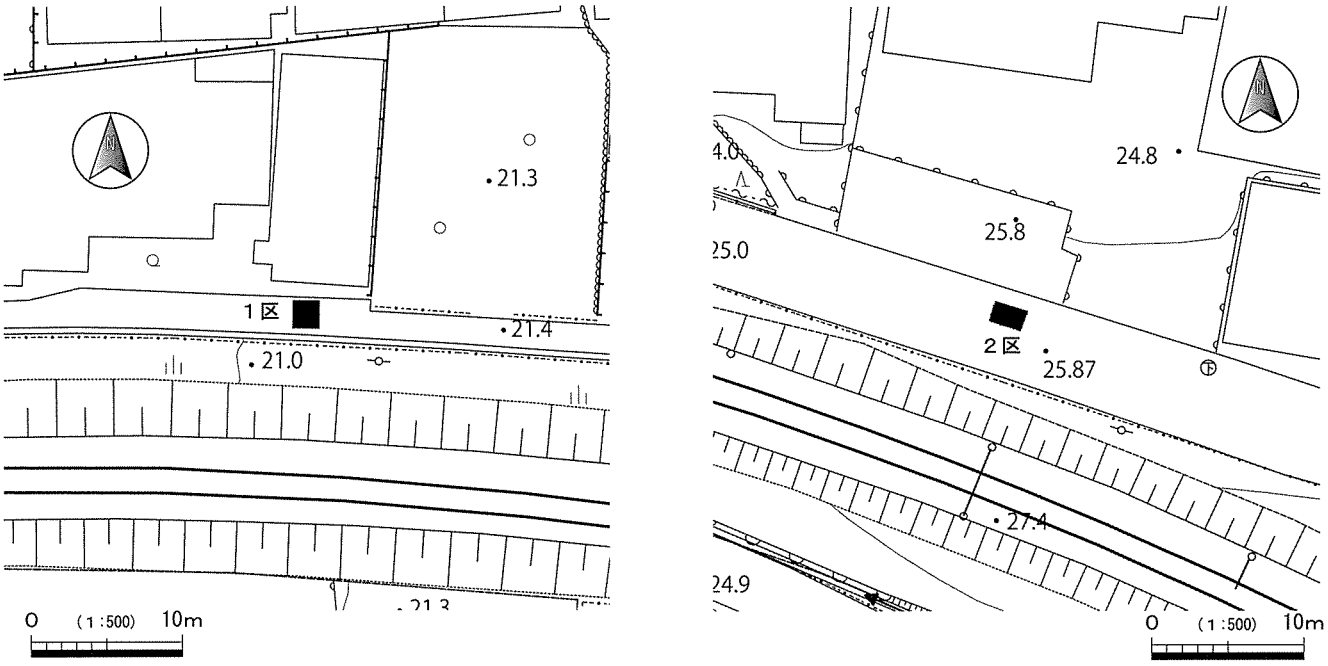
水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町一丁目、水越二・五・七丁目、千塚一～三丁目、服部川一～七丁目、神立一丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正９（1920）年に清原得巖氏により石鏃が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53（1978）年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査（S53府教委）が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落遺構（井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等）、中世の集落遺構（掘立柱建物・井戸等）が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。

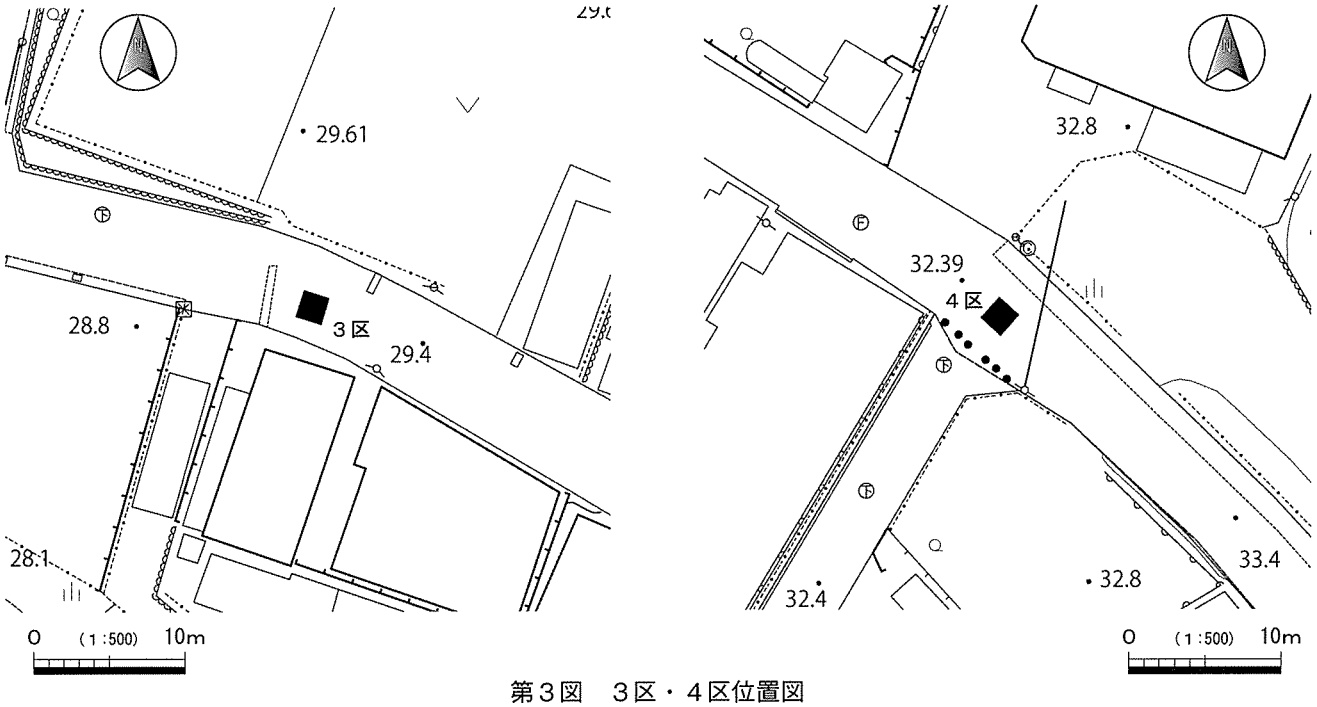
今回の調査地は近鉄信貴線の北にある東西道路上に位置している。周辺では北西で第13・16次調査を実施している他、西部で研究会第４・６・７・８次調査を実施している。これらの調査では弥生時代後期を中心とした遺構・遺物が検出され、この一帯が当該期の集落域であったことが確認されている。さらに第７次調査では縄文時代晩期の土器埋納ピットの可能性がある遺構の他、平安時代では土坑や地鎮祭祀を示唆するような土器埋納ピットが検出されており特筆される。



第１図　調査地周辺図



第２図　１区・２区位置図



第３図　３区・４区位置図

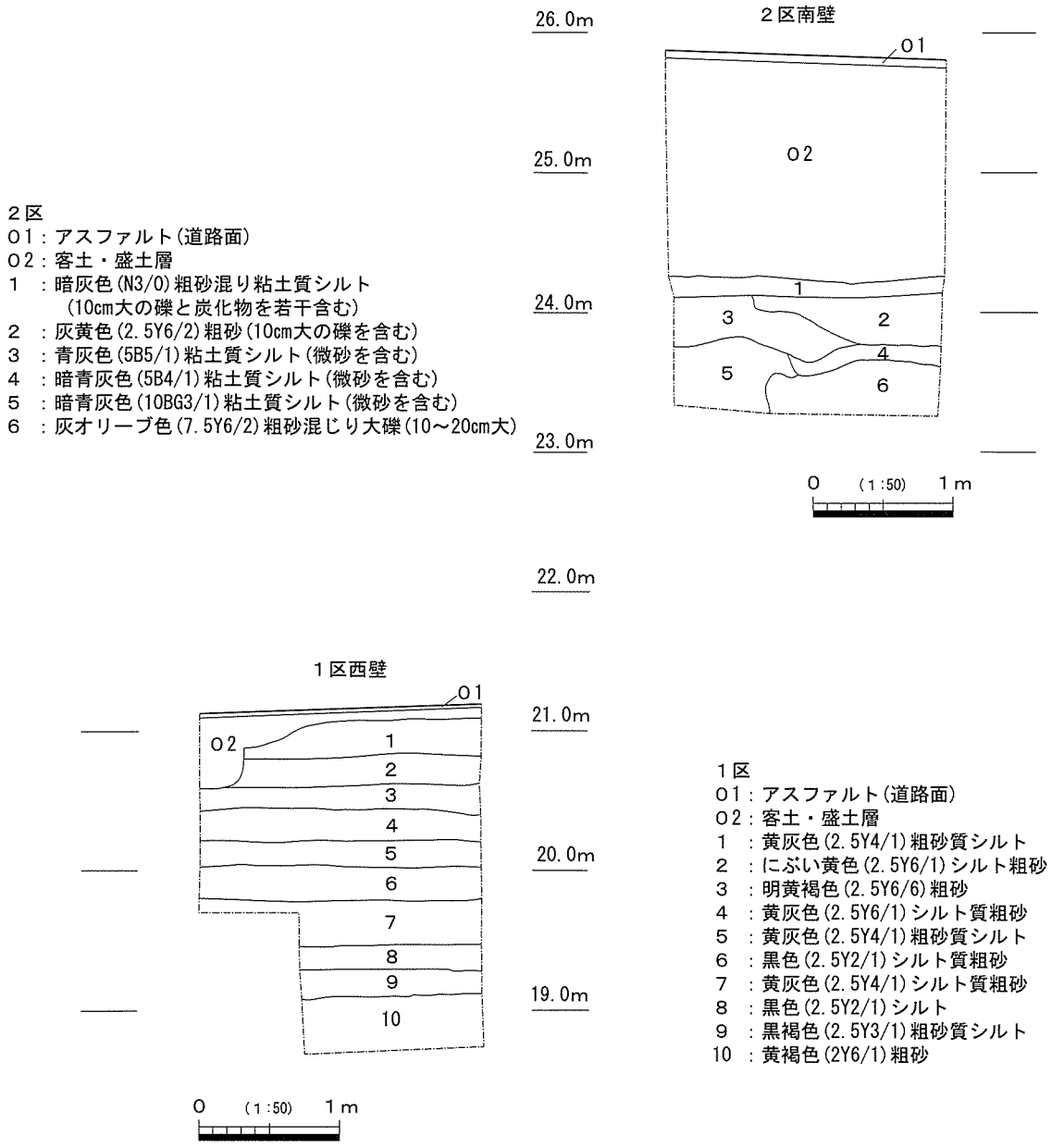
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市服部川六丁目地内で、実施した下水道工事（27-34工区）に伴う調査で、当研究会が水越遺跡内で行った第24次調査である。

調査地は人孔部分４箇所（西から１区（2.0×2.0m）、２区（1.0×2.0m）、３区（2.0×2.0m）、４区（2.0×2.0m））で、総面積は約14.0㎡を測る。

調査は現地表（１区T.P.+21.2m、２区T.P.+25.8m、３区T.P.+29.3m、４区T.P.+32.7m）下2.5mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

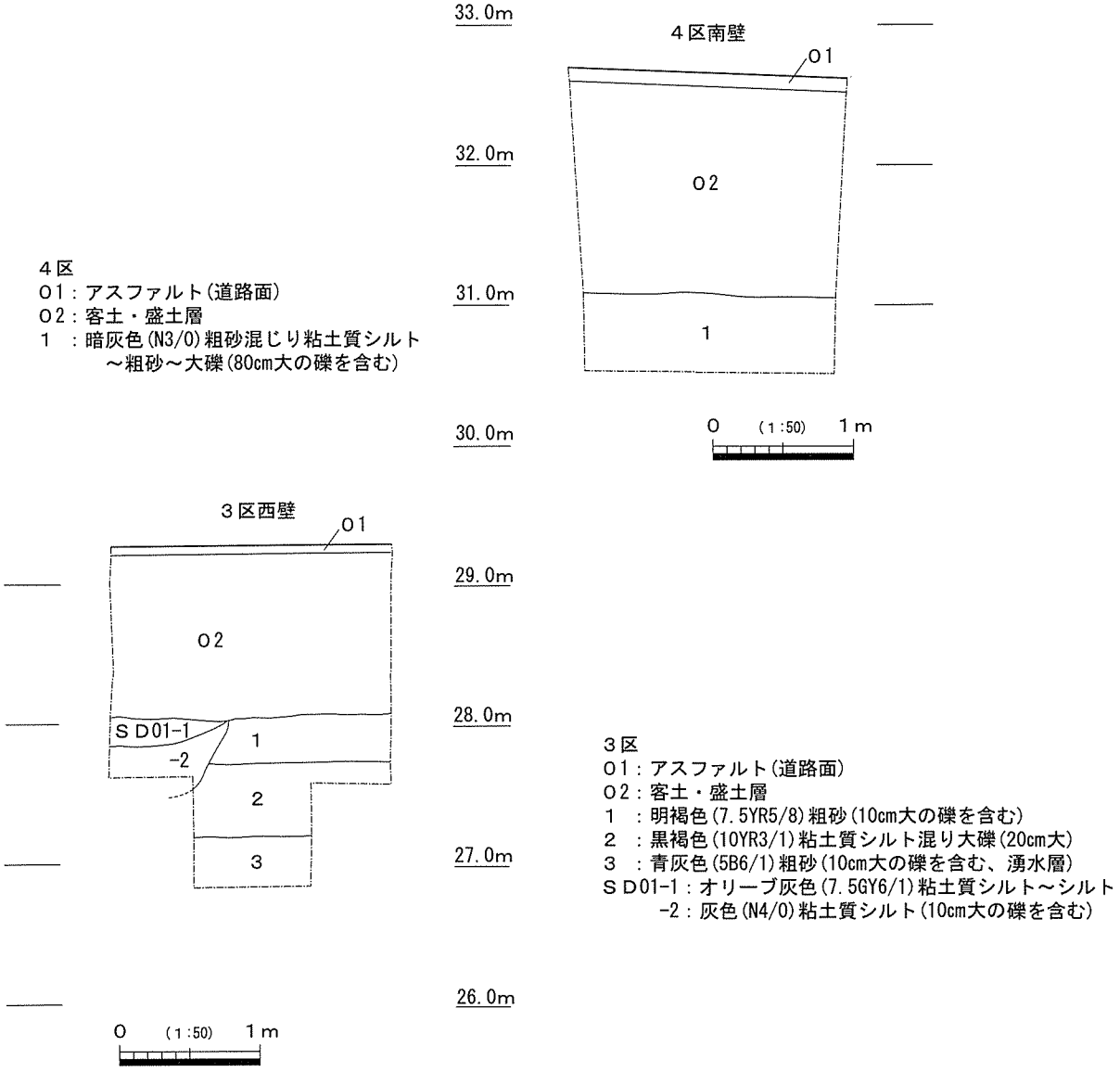


第４図　１区・２区断面図（S＝1/50）

２）基本層序

１区では、現地表（T.P.+21.2m）下0.1mは客土・盛土層・攪乱（０層）で、以下現地表下2.5mまで、10層の基本層序を確認した。１～２層（T.P.+20.6～21.1m）は近世以降現代までの作土層である。３層（T.P.+20.4～20.6m）は氾濫堆積層で、４～10層（T.P. +19.1m以下）は湿地性堆積層である。

２区では、現地表（T.P.+25.8m）下1.6mは客土・盛土層・攪乱（０層）で、以下現地表下2.5mまで、６層の基本層序を確認した。１層（T.P.+24.1～24.2m）は近世以降の整地層で、２～６層（T.P.+24.1m以下）は、埋没河川の堆積層である。



第５図　３区・４区断面図（Ｓ＝1/50）

３区では、現地表（T.P.+29.3m）下1.2mは客土・盛土層・攪乱（０層）で、以下現地表下2.5mまで、３層の基本層序を確認した。１～３層（T.P.+28.1m以下）は、大礫～粗砂層である。

４区では、現地表（T.P.+32.7m）下1.6mは客土・盛土層・攪乱（０層）で、以下現地表下2.2mまで調査したが、0.8m大の大礫を含む粗砂～大礫層（T.P.+31.1m以下）のみで、３区１～３層ともども土石流による堆積と思われる。

３）検出遺構と出土遺物

遺構は３区１層上面で近世以降の東西方向の溝状遺構を確認したのみである。

出土遺物は、１区４層から古式土師器（庄内式土器）、２区３層から弥生土器、３区溝状遺構から瓦質土管が出土した。

3．まとめ

調査の結果、遺構や出土遺物はほとんど確認できなかったが、高低差11.5mを測る調査地においてその周辺の地質形成環境を知ることができた。低位の１区では、２m以上の湿地性堆積が認められ比較的安定した環境にあってその上面は耕地化（近世以降）される。２区では、北東から南西あるいは東から西へ流れると思われる埋没河川の存在を確認できた。さらに東方高位の３・４区では、土石流による砂泥大礫層が認められた。そしてこの土石流は１・２区には至っておらず２区と３区の間、T.P.+28m前後付近まで影響を及ぼし終息するものであったと考えられる。

【参考文献】

・高萩千秋1992「Ⅷ　水越遺跡第４次調査（MK91－4)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告34』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋1998「ⅩⅧ　水越遺跡第６次調査（MK96－6)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子「Ⅱ　水越遺跡第７次調査（MK2000－7)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告２　平成12年度』八尾市教育委員会・財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一・米井友美2011「Ⅵ　水越遺跡第８次調査（MK2005－8)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告135』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2014「ⅩⅤ　水越遺跡第13次調査（MK2013－13)」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告142』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2015「ⅩⅩⅠ　水越遺跡第16次調査（MK2014－16)」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告146』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

1区西壁

2区南壁

3区南西壁(北東から)

4区南壁

3区SD01検出状況(東から)

調査地周辺状況(1区付近・東から)

調査地周辺状況(3区付近・東から)

調査地周辺状況(4区付近・東から)

XII　水越遺跡第25次調査(ＭＫ2015－25)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越一・二丁目、千塚一・二丁目地内で実施した下水道工事（27-33工区）に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する水越遺跡第21次調査（ＭＫ2015－21）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成27年12月１日～平成27年12月24日（外業実働３日：その内夜間調査２日）に、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約12.0㎡である。
1．現地調査においては、伊藤静江・李　聖子の参加を得た。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成28年３月をもって終了した。
　デジタルトレース－樋口
1．本書の執筆・編集は樋口が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……59
2．調査概要……60
　1）調査の方法と経過……60
　2）基本層序……61
　3）検出遺構と出土遺物……61
3．まとめ……61

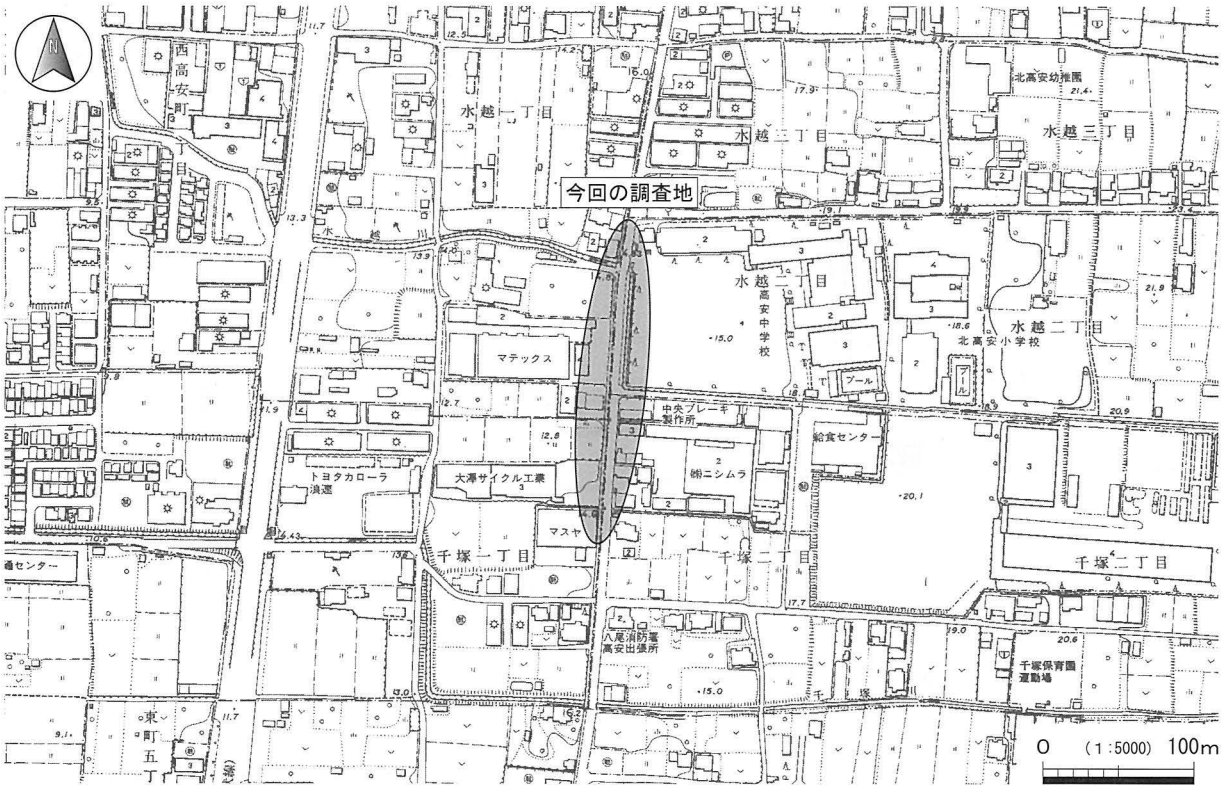
Ⅻ　水越遺跡第25次調査（ＭＫ 2015 － 25）

１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部に位置する。今回報告する水越遺跡は、八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安一丁目、水越二・五・七丁目、千塚一～三丁目、服部川一～七丁目、神立一丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川の東西約1.25km、南北約1.2kmがその範囲と推定されている。地形的には、生駒山地西麓部を西流する小河川により形成された扇状地から扇状地性低地（標高12～55m）に展開する遺跡である。遺跡の西側には、旧大和川の主流であった恩智川や玉串川の氾濫原が拡がっている。

本遺跡は、大正９（1920）年、清原得巌氏によって石鏃が採集されたことに端を発する。その後、昭和５（1930）年には、勾玉研磨用の砥石をはじめ滑石製小玉や管玉の未完成品といった石製品が表採されたほか、昭和９（1934）年には東高野街道（現、旧国道170号線）の改修工事が行われ、現地表下0.6m付近に堆積する黒褐色を呈した地層から弥生時代後期に帰属する土器が発見された。

昭和53（1978）年 、本遺跡内で初となる本格的な調査（府立清友高校新設工事に伴う発掘調査）が大阪府教育委員会により行われ、縄文時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。特に弥生時代～古墳時代にかけては、井戸や溝のほか、方形周溝墓や土器棺墓から成る墓域が検出された。また古墳時代中期については、玉作りに関連する遺跡であったことを示唆する滑石製管玉の未完成品などの石製品が多く出土し、本遺跡の東部に鎮座する式内社玉祖神社との有機的な関係を彷



第１図　調査地周辺図

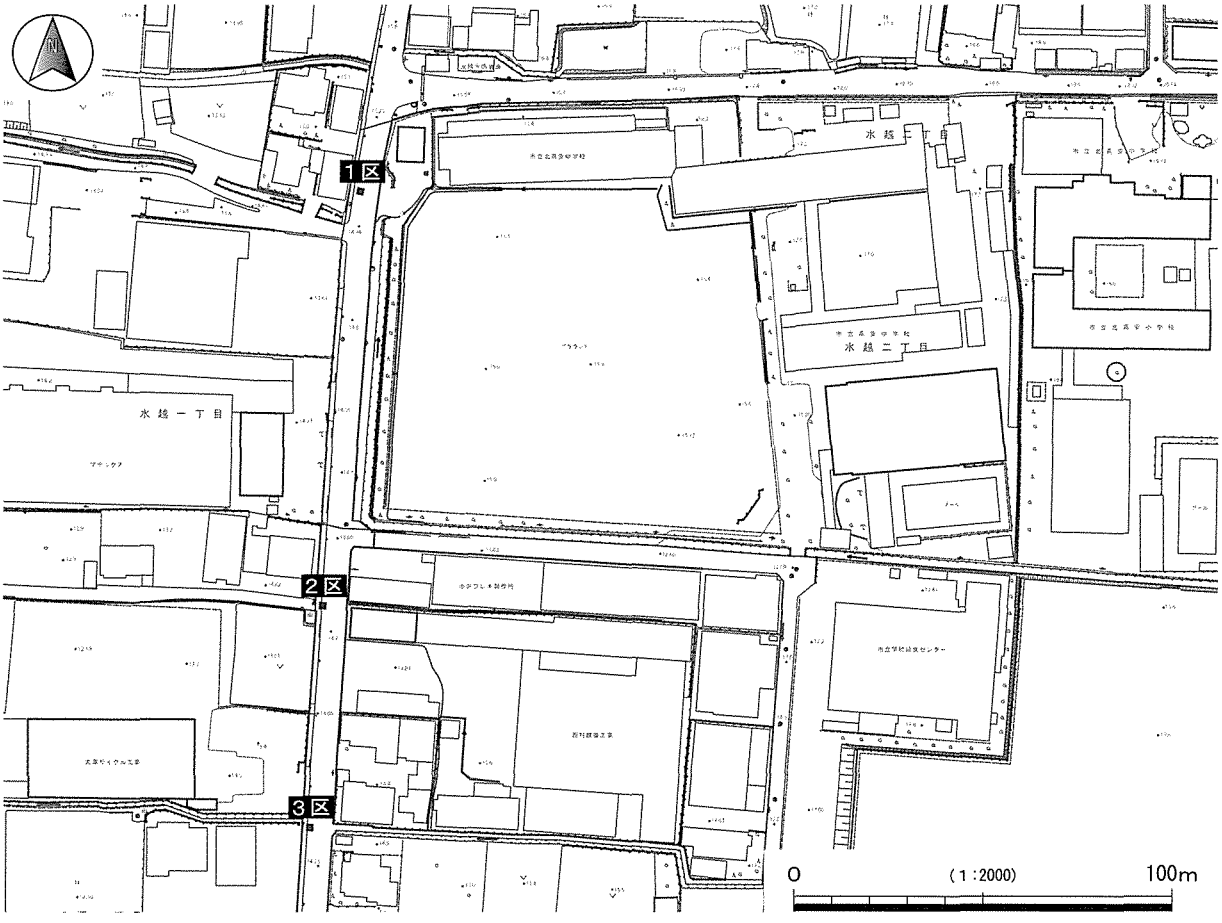
彿させる成果が得られた。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会による試掘調査や数次に亘る本調査が行われ、縄文時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されるようになってきた。

本遺跡を含む生駒山地西麓部には、多くの遺跡が分布する。北には、弥生時代後期初頭の鋳造鉄剣や古墳時代前期の瑪瑙製鏃形石製品を出土した大竹西遺跡をはじめ、大竹遺跡、太田川遺跡などの縄文時代以降の複合遺跡が展開するほか、古墳時代中期前半に造営された中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳（墳丘長160m以上）や中期後半に比定される鏡塚古墳（径約28mの円墳または前方後円墳と推定される）が知られる。東を見ると、生駒山地尾根上には、古墳時代後期以降に築造された高安古墳群（200基以上）が群集している。南には、高安古墳群にさきがけて横穴式石室を採用し、盟主的な役割を担ったことが推測される郡川西塚古墳・東塚古墳が、南北を貫く東高野街道を挟んで東西に対峙している。時代が下ると、本遺跡の南端付近において郡川廃寺（高麗寺跡：奈良時代前期～鎌倉時代）の建立が推測されるが、詳細は分かっていない。

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は八尾市水越一・二丁目、千塚一・二丁目地内で実施した下水道工事（27-33工区）に伴うもので、当研究会が水越遺跡で実施した第25次調査（ＭＫ2015－25）にあたる。調



第２図　調査区位置図

査区は人孔部分（2.0×2.0m　面積約4.0㎡）３箇所（北から１～３区）で、総面積は約12.0㎡を測る。

調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表（１区：T.P.+15.15m　２区：T.P.+14.74m　３区：T.P.+14.84m）下1.0m前後までを機械、以下1.5m前後までを人力と機械を併用しながら掘削し、平面的な調査を実施、遺構・遺物の検出に努めた。なお、１・２区は夜間に調査を実施した。

調査で使用した標高は、調査区付近に打設された下水道工事使用のベンチマークである。

２）基本層序

現地表下１区では1.6m、２区では0.6～1.2m、３区では2.0～2.2mまで客土・盛土層・攪乱（０層）であった。以下現地表下2.5mまでで、10層の基本層序を確認した。１・２層は２区確認の作土層（１層:T.P.+14.1m　２層:T.P.+14.0m）である。３層は２区確認の土壌化層（T.P.+13.8m）である。４・５層は２区確認の湿地性堆積層（４層：T.P.+13.7m　５層：T.P.+13.6m）である。６層は２区確認の土壌化層（T.P.+13.3m）である。７層は２区確認のシルト～極細粒砂優勢の扇状地性堆積層（T.P.+13.1m）である。溢流堆積層の可能性がある。８層は１区確認の扇状地性堆積層（T.P.+13.5m以下）である。９層は２区確認の扇状地性堆積層（T.P.+13.0～13.1m以下）である。10層は３区確認の扇状地性堆積層（T.P.+12.7～12.8m以下）である。いずれも砂礫優勢層であるが、一連の堆積層かは不明である。

３）検出遺構と出土遺物

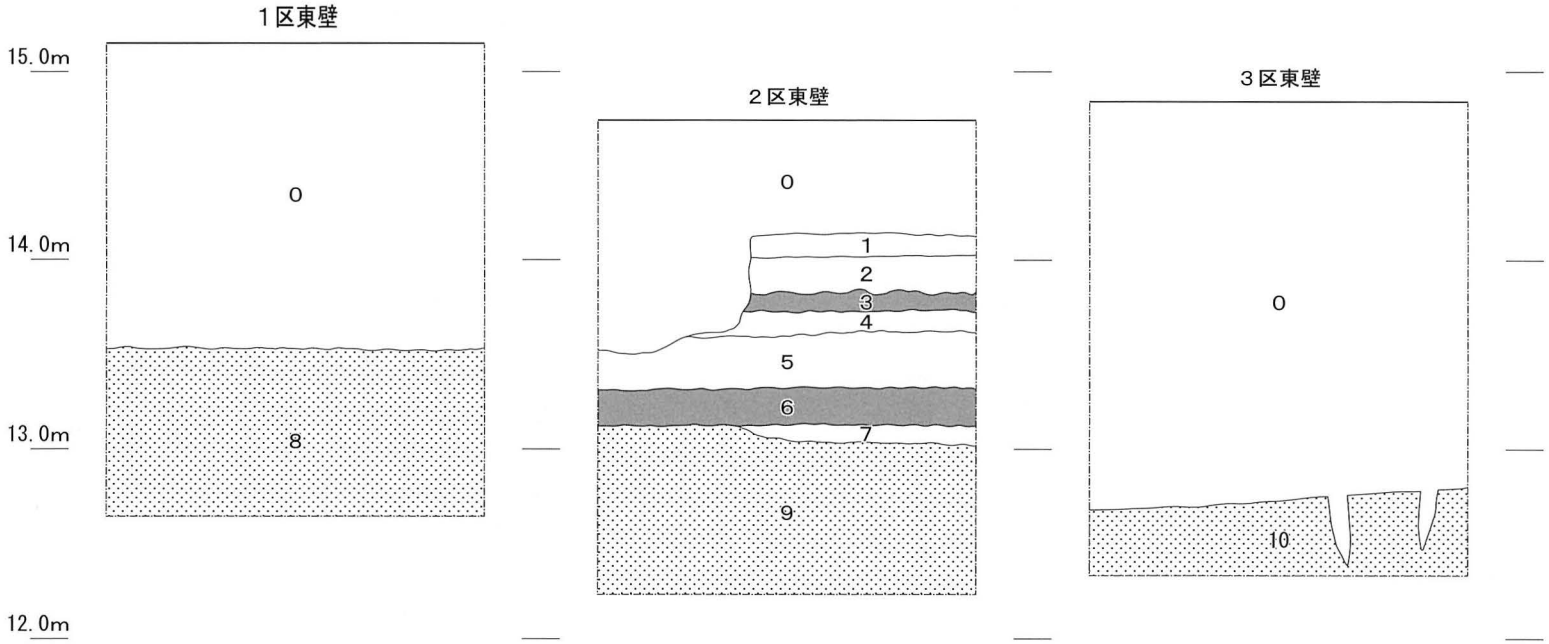
なし。

３．まとめ

今回の調査では、２区において土壌化層が２層（３・６層）存在することを確認した。本区の北北東約20mに位置する第21次調査１区では、T.P.+14.1m前後において古墳時代前期以前の土壌化層が存在することを確認しているが、今回の調査における３層が標高的に当該期の対応層の可能性が高い。既設の埋設物による攪乱が著しく遺跡の状況は不明な点が多いが、部分的に土壌化層が遺存していることが考えられ、周辺で調査が行われる際には注意されたい。

【参考文献】

・大阪府教育委員会1978『府立清友高等学校新築工事に伴う発掘調査現地説明会資料』
・吉岡　哲1988「河内の玉作遺跡－本校敷地周辺の遺跡とその性格－」『紀要「清友」第１号』大阪府立清友高等学校
・西村公助2015「Ⅵ　水越遺跡第17次調査（ＭＫ2014－17)」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告147』公益財団法人八尾市文化財調査研究会



第３図　断面図（S＝1/40）

０層：客土・盛土層・撹乱
１層：にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト(作土層)
２層：にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト(作土層)
３層：黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト～シルト(土壌化層)
４層：灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト(湿地性堆積層)
５層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト(湿地性堆積層)
６層：黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト～極細粒砂(土壌化層)
７層：にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト～極細粒砂(扇状地性堆積層)
８層：黄褐色(2.5Y5/3)中礫混粗粒砂～細礫(扇状地性堆積層)
９層：暗灰黄色(2.5Y5/2)中礫混粗粒砂～細礫(扇状地性堆積層)
10層：青灰色(5B5/1)シルト～極細粒砂(扇状地性堆積層)

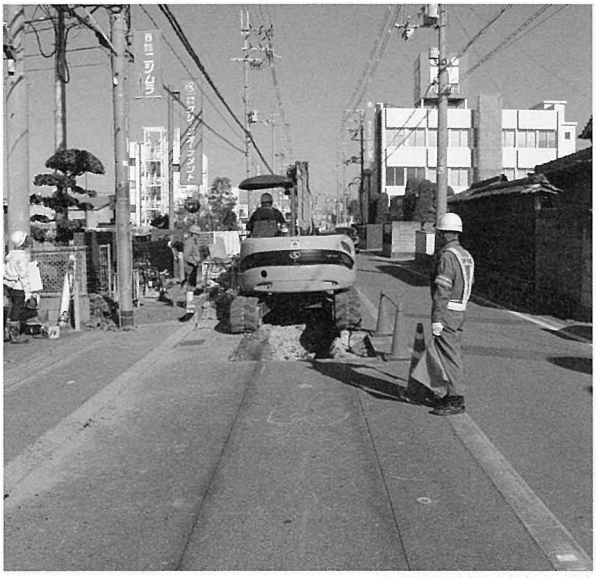
図版1

１区周辺状況（北西から）

１区東壁（西から）

２区周辺状況（南から）

２区東壁（西から）



３区周辺状況（南から）

３区東壁（西から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおたがわいせき　おんぢいせき　きのもといせき　こおりがわいせき　じんぐうじいせき　みずこしいせき
書　　名	太田川遺跡　　恩智遺跡　　木の本遺跡　　郡川遺跡　　神宮寺遺跡　　水越遺跡
副 書 名	下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	149
編 著 者 名	Ⅰ・Ⅳ・Ⅹ・Ⅻ樋口　薫　Ⅱ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ西村公助(編)　Ⅲ坪田真一　Ⅴ・Ⅵ平田洋司　Ⅺ岡本武司
編 集 機 関	公益財団法人八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581－0821　　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2016年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
おおたがわいせき 太田川遺跡 (第５次調査)	おおさかふやおしみずこし１ちょうめ 大阪府八尾市水越一丁目	27212	55	34度 38分 06秒	135度 38分 02秒	20150612	約4	記録保存調査 公共下水道工事 (26－6工区)
おおたがわいせき 太田川遺跡 (第６次調査)	おおさかふやおしみずこし１、３ちょうめ 大阪府八尾市水越一、三丁目	27212	55	34度 38分 15秒	135度 38分 11秒	20150625	約4	記録保存調査 公共下水道工事 (26－116工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第37次調査)	おおさかふやおしおんぢみなみまち５ちょうめ 大阪府八尾市恩智南町五丁目	27212	30	34度 36分 11秒	135度 37分 58秒	20140819 ～ 20150308	約16	記録保存調査 公共下水道工事 (25－36工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第40次調査)	おおさかふやおしおんぢなかまち５ちょうめ 大阪府八尾市恩智中町五丁目	27212	30	34度 36分 26秒	135度 37分 56秒	20150915 ～ 20151216	約12	記録保存調査 公共下水道工事 (26－41工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第41次調査)	おおさかふやおしおんぢきたまち２ちょうめ 大阪府八尾市恩智北町二丁目	27212	30	34度 36分 38秒	135度 37分 42秒	20150930 ～ 20151019	約8	記録保存調査 公共下水道工事 (27－12工区)
きのもといせき 木の本遺跡 (第29次調査)	おおさかふやおしくうこう１ちょうめ 大阪府八尾市空港一丁目	27212	35	34度 36分 06秒	135度 35分 57秒	20150827 ～ 20150828	約8	記録保存調査 公共下水道工事 (26－30工区)
こおりかわいせき 郡川遺跡 (第23次調査)	おおさかふやおしきょうこうじ５ちょうめ 大阪府八尾市教興寺五丁目	27212	60	34度 36分 37秒	135度 59分 58秒	20150612 ～ 20150730	約22	記録保存調査 公共下水道工事 (26－18工区)
こおりかわいせき 郡川遺跡 (第24次調査)	おおさかふやおしきょうこうじ７ちょうめ・くろだに１ちょうめ・３ちょうめ 大阪府八尾市教興寺七丁目・黒谷一丁目・三丁目	27212	60	34度 37分 09秒	135度 38分 13秒	2050907 ～ 20151009	約18	記録保存調査 公共下水道工事 (26－37工区)
じんぐうじいせき 神宮寺遺跡 (第３次調査)	おおさかふやおしじんぐうじ５ちょうめ 大阪府八尾市神宮寺五丁目	27212	49	34度 36分 08秒	135度 37分 54秒	20150227 ～ 20150324	約11	記録保存調査 公共下水道工事 (25－212工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第21次調査)	おおさかふやおしちづか２ちょうめ 大阪府八尾市千塚二丁目	27212	42	34度 38分 00秒	135度 38分 15秒	20150817 ～ 20150928	約81	記録保存調査 公共下水道工事 (27－18工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第24次調査)	おおさかふやおしはっとりかわ６ちょうめ 大阪府八尾市服部川六丁目	27212	42	34度 37分 38秒	135度 38分 25秒	20151124 ～ 20151218	約14	記録保存調査 公共下水道工事 (27－34工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第25次調査)	おおさかふやおしみずこし１・２ちょうめ、ちづか１・２ちょうめ 大阪府八尾市水越一・二丁目、千塚一・二丁目	27212	42	34度 38分 00秒	135度 38分 10秒	20151201 ～ 20151224	約12	記録保存調査 公共下水道工事 (27－33工区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
太田川遺跡 （第５次調査）	集落		河川堆積層		
太田川遺跡 （第６次調査）	集落		扇状地性堆積層		
恩智遺跡 （第37次調査）	集落	弥生時代後期	落ち込み	弥生土器	
恩智遺跡 （第40次調査）	集落		扇状地性堆積層		
恩智遺跡 （第41次調査）	集落		扇状地性堆積層		
木の本遺跡 （第29次調査）	集落	近世	作土層		
郡川遺跡 （第23次調査）	集落		作土層		
郡川遺跡 （第24次調査）	集落		扇状地性堆積層		
神宮寺遺跡 （第３次調査）	集落		扇状地性堆積層		
水越遺跡 （第21次調査）	集落	古墳時代前期	扇状地性堆積層 作土層	古式土師器	
水越遺跡 （第24次調査）	集落	近世	溝 作土層		
水越遺跡 （第25次調査）	集落		扇状地性堆積層 作土層		

要　約	恩智遺跡第37次調査では弥生時代後期の遺構を検出した。南の神宮寺遺跡で確認されている当該期の集落域が北へ広がっている可能性が高くなった。

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告149

Ⅰ 太田川遺跡(第５次調査)
Ⅱ 太田川遺跡(第６次調査)
Ⅲ 恩 智 遺 跡(第37次調査)
Ⅳ 恩 智 遺 跡(第40次調査)
Ⅴ 恩 智 遺 跡(第41次調査)
Ⅵ 木の本遺跡(第29次調査)
Ⅶ 郡 川 遺 跡(第23次調査)
Ⅷ 郡 川 遺 跡(第24次調査)
Ⅸ 神宮寺遺跡(第３次調査)
Ⅹ 水 越 遺 跡(第21次調査)
Ⅺ 水 越 遺 跡(第24次調査)
Ⅻ 水 越 遺 跡(第25次調査)

発　行　　平成28年３月
編　集　　公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　　㈱近畿印刷センター
表　紙　　レザック66　　＜260Kg＞
本　文　　マットコート　＜ 70Kg＞
図　版　　マットコート　＜ 70Kg＞